
一ヨーク・ラブストーリー / エピソード2：いっしょにくらそう（Borderline）

栗須じょの

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ゴーリー・ラブストーリー」 / ハピソード2：いつしょ

（Borderline）

【Zコード】

Z4570C

【作者名】

栗須じょ

【あらすじ】

部屋が火災に見舞われるというアクシデントから、ディーンとホールは一緒に暮らしあはじめる。親しい友人と楽しい共同生活。しかしスタートしてみると、おたがいのいろいろなことが目につきはじめ、ついにふたりは大喧嘩。早くも別居の危機をむかえるが……。

(前書き)

いかがは 一話完結のシリーズ物 につき、ヒッソード第1話から
お読み頂けると分かり易いと思います。
連載はまだまだ続きますが、本作品においては完結しています。

1・マンハッタンではとても火事が多い。

これまで実際に炎を目のあたりにしたことはないが、サイレンを鳴らした消防車が、年中、走り回っているところを見ると、おそらくそれは多いのだと思う。

2・マンハッタンの家賃はとても高い。

これはおれが実際に目のあたりにしている真実。このふたつがどうつながるかって、まず結論から言おう。おれとポールは一緒に住むことに決めた。

その発端は、おれたちの住んでいるアパートメントが火事にあったことだ。

ニューヨーク市の有能な消防隊員の働きにより、住人に死傷者は出なかつたが、物質的な損害は決して小さなものではなかつた。出火した部屋は完全に燃え落ち、続く外廊下は煤によつて真つ黒。フロアーコとのメインブレーカーは熔け、割れた外壁のタイルは、火事の凄まじさをミッドタウンの住人へ誇示している。

火元は女性のひとり暮らしで、出火の原因はベッドサイドのオイル・ランプとのこと。昨今の禁煙運動のおかげでタバコによる火災は減つたものの、ここ最近はキャンドルやランプ、インセンス（お香）からの出火がとても多いと消防隊員は言つていた。マンハッタンでは火事の原因すらも、移り変わる流行のひとつらしい。

今回の被害はワンフロアだけにとどまらず、出火元の真下の部屋も、火こそ入らなかつたものの、かなりの打撃を被ることとなつた。天井の一部には穴が空き、消火時の放水で部屋は水浸し。ベッドと電化製品は使い物にならない つまり、とても住める状態ではないということ。出火元の真下の部屋、それはポールの部屋だった。

火災の被害者には保険会社が仮住まいを提供してくれることになつていたが、それは彼の勤務するヘアサロンからは離れすぎている。「だったら修復があわるまで、うちの部屋に住めば?」

そんな何気ないおれの提案から端を発し、さらについ進んで「だったら、ういつそのこと一緒に暮らしてしまおつ!」とこう話になるまでは、いろいろの時間を使さなかつた。

“ポールと一緒に住むことになった”と、おれが言つたときの、ローマンの第一声はこうだ。

「んまあ! “ディーン! -” ひつぱりあなたもわたしたちの仲間だつたのね! よくへやつたわ! ママにこもつてよくへ顔を見せてちょうだい! -」

ローマンは皿を浮かべ、両手でおれの顔をさみ込み、口づけんばかりに顔を近づけた。きらきらと輝くヘイゼルの瞳。ハンサムのなかのハンサムとは彼のこと。こんな近くで見ても、その顔には少しの欠点も見つけられない。そり、顔だけは。

吸いつくよくな両手を頬からはがし、おれは言つた。

「きみという種族が、この世に一匹しかいないことは同情するけどね、おれのことを“仲間”だと勘違いするのはやめてくれない?」

「あら、それ、どうこう意味?」

「おれとポールはきみが思つてこようつたような関係になつてなつて」と、「こと」「」

「プラトニック・ラブなのね」

「プラトニック・ラブじゃない、“プラトニック”だ

「でもキスくらはましたでしょ?」

「してないよ」

「あきれた! 今どきの小学生より遅れてるわね! ぐるりと皿を回し、おおげさに両手を広げてみせる。

「おれとポールはそういうんじゃない。ルームショアをしてくるだ

け。単にそれだけだ。おれたちの関係はこれまでと変わらない。友達のままさ

「あらま、そおう……」ローマンは胸の前で腕を組み、思案げな表情をしてみせた。「やあね……ポールつてば、なに考へてるのかしら？　あたしが彼の立場だつたら、あんたなんかとつと押し倒してることよ

「ポールがきみみたいだつたら、一緒に住むような馬鹿はしないよ」「ま、憎らしい。いいわ、あんたも今にわかるわよ。ひとつ屋根の下に若い男がふたり……そんなシチュエーションでなにも起きないわけはないんだから」

“ひとつ屋根の下に若い男がふたり”　そんなありきたりのシチュエーションから、“なにも起きないわけはない”などと予測するのはローマンだけだ。この共同生活から導き出される効果は、普通に考えれば、“経済効果”といったところ。マンハッタンの家賃の高さはたぶん世界一。人と住むのは賢明な行為だ。

同居の支度は至極カンタン。友達の数人の手を借りて、ポールの家財道具を八階から、おれの部屋の十五階へと移動させる。あとは休日ごとに、ふたりで家のなかを徐々に整理していけばいいだけ。

「ディーン、これ何かな？」

おれはダンボール箱を解体する手をとめて、ポールのところへ向かつた。

「どうした？」

「うん、これ何？」彼は茶色の粉が入った瓶を手にし、眺めている。

「ああ、それか。インドネシアの粉コーヒー。ラベルを貼つておこうか？」

「いや、いいよ。もう覚えた。コーヒーシュガーを探してたんだけど……」

「砂糖はこここの棚だ。ほらこれ」言つて、シュガーポットを手渡す。

人と暮らすとなると、ひとりだつたときには必要でなかつたものが必要になつてくる。

彼がここで生活するうえで、コーヒーのラベル以外に、おれはどんな配慮をしてあげたほうがいいだらう？

ポールは砂糖壺を開けながら、「そろそろコーヒー休憩にしようか」と提案。「そつちの作業は？　きりがいいところかな？」

「こつちはいつでも。“きりがいいところ”なんてまだまだなさそうだ。おれがコーヒーを煎れるよ。そのあいだテーブルの上を片付けてくれるか？」

「うん、わかつた」

うちの「コーヒーメーカーはエスプレッソとカプチーノも作れる優れモノだ。よつてその使い方はちょっとややこしい。この操作方法もいづれはポールに憶えてもらわないと。

“人と住むのは賢明だ”とさきほど述べたが、その賢明な選択を人生に導入するのは、おれにとつてこれが初めてのことだ。ガールフレンドを部屋に泊めることは、これまでに何度もあり、それは歯ブラシと着替えを常備するほどまでになつてはいたが、彼女たちは、本格的に生活を共にするまでには至らなかつた。一緒に暮らすかという話が出たこともあるが、『それならここを引き払つてもう少し広い物件に移ろう』とか、『庭があるところだつたら素敵とかを、あれこれ言い合つてゐるうち、交際そのものが終了する』というのが、これまでのパターン。ガールフレンドと一緒に住むことになれば、どうしたつて結婚のことを意識しないわけにはいかない。同棲のプランが持ち上がるたび、実現する前に別れてしまうのは、おれ自身、結婚といつものを感じてゐる部分があるからだ。

今回ポールとの同居がスマーズに実現したのは、火事というアクシデントに見舞われたことと、彼とは結婚を意識するような間柄ではないということ。そのふたつの要素がなかつたら、きっとおれはこれまで通り、ひとりで暮らすということを選択し続けたに違いない

い。

リビングとつながる対面カウンターの小窓から、ポールが顔を覗かせた。

「テーブルを片付けたよ……ああ、いい匂い」コーヒーメーカーから立ち上る香りに、目を細め、「人にコーヒーを煎れてもうれるつてのは、やっぱりいいね」と微笑む。

共同生活から導き出されるのは、経済効果だけにとどまらない。煎れたてのコーヒーの香りを共有する相手がいるということ。そうした愉しみも同居のメリットだ。

「ミ袋とダンボール箱に囮まれつつのコーヒーブレイク。部屋の中央に置かれたショーザロング（細長いひとり掛けの寝椅子）は二台。それをためつすがめつ眺め、ポールが言つ。

「ぼくたちが並んで横たわっていたら、ビーチで日焼けしているみたいに見えるよ、きっと」

「ああ、手にマイタイを持ってば完璧だ」

黒いほうはポールなので、ハラコ柄はおれの。別に一緒に買いに走ったわけじゃない。これはただの偶然。ル・ゴルビジェは誰もが好きなデザイナー家具だ。

「きみもこのアルバム持つてるんだ？」

BGMにと流しつぱなしにしているiTunesに耳を留めるポール。今かかっているのは、ニコ・ヨー・カーなつきつと誰でも一枚は持っているであろう、ルー・リードの作品。

「CDにもラベルが必要かな?」と、おれは訊ねる。

「必要ないんじゃない? きみのCDとぼくのCDが入れ替わっても中身は一緒だ」

「おれのCDケースはキズだらけだ。よくそのへんに置きっぱなしにするから」

「じゃ、それで判別がつくね」

話は音楽のことに及び、お互いどんなアルバムを持っているか、照らし合わせてみようということになった。こうこうことをして遊

んでいるから、部屋の片付けは一向にはかどらない。

結果、ルー・リード以外にも、かぶついているアルバムは何枚かあつた。音楽の趣味はボーダーラインをクリア。どちらかがミュージカルマニアだつたり、隠れハードロックの趣味があつた場合、その同居生活は悲しみのうちに終わるに違いない。

「コーヒー カップを洗つていると、ポールが「へえ！」と弾むような声を出した。「ねえ、見てこんなまでおそいだ」

彼の呼びかけにおれは振り向いた。手には泡だらけのスポンジとコーヒー カップを持ったまま。

ポールが指示示すキッチンカウンターには、ドレスを着た女性をかたどつたワイン・オーブナー。赤いドレスのアンナGはポールのもので、黒いドレスの彼女はおれの。アレッシィの商品はとてもメジャーだが、実のところおれの趣味とはかけ離れている。

「ずっと前にガールフレンドがワインと一緒に持つてきて置いていつたんだ。そういうのは自分じゃ買わないな」

「うん、これはぼくも人からプレゼントされた。ふたつ並べるとかわいいね。ダンスしてみたいで」

「女同士でダンス？」

「彼女たちもゲイのか？」

おれはあいまいな笑みを浮かべてその言葉をやりすゞす。ポールはそれに気づき「ごめん、ぼくたちはちがうよね」と苦笑した。

男同士がひとつ屋根の下に暮らし始める。そのうち約一名はゲイ。ここまで情報から“ふたりはカップル”だと思つるのは想像力過多だろうか？ おれたちの関係はそうではないが、いい年をした独身男がふたりで暮らすというキーワードを聞けば、その答えが導き出されてもなんら不思議ではない。

「ディーン、そでが……」

「ん？」

「そでが落ちてる。濡れるよ」

ポールはおれのシャツの袖を折つて上げてくれた。彼はこうこう

細かいところに気がつく男だ。それは美容師という職業によるものなのかもしれない。

今のような絵面を見て“ふたりはカップル”だと思うのは想像力過多だろうか？もちろんおれたちの関係はそうではない。しかし、そう見えるかもしれないことは事実。まあでも、他の奴らにどう思われるとかは別にどうでもいい。問題は“おれたち自身”がどうであるかということ。自分たちが関係性をきちんと理解していれば、同居については何の問題もないし、アンナGシスターズが幸福なゲイカップルだとしても、おれは構わない。彼女たちはワインオープナーとしても有能な腕（足か？）を持っている。そもそもローマンの言ったようなことが現実化するとは、考えにくいこと極まりない。ポールは分別のある男だし、おれは完全なるストレート（しかもかなりの女好き）。さきほど彼が言つたように『ぼくたちはちがう』のであって、だいたいそうでなけりや、とても男同事しじょに暮らすなんてことは不可能というのだ。

ポールは素晴らしい友達だ。ディーンがストレートでも構わないと彼が思うように、ポールがゲイでもおれは構わない。おれたちの関係はシスターーズとは違う。おれたちはそれをよくわかっている。

キッチンでオレンジを絞つていてるところに、マフラーをぐるぐる

巻きにしたポールがやってきて声をかける。

「これから買い物に行くんだけど、なにが必要なものある？ 洋服以外で」

“洋服以外で”というのは、今シャワーを浴びたばかりのおれが素っ裸でいることを皮肉ったコメントだ。（ちなみに腰にはバスターを巻いている。いくらなんでもそれだけは、一応）

「どこに行く？」オレンジジュースに口をつけ、おれは訊いた。

「スーパー・マーケットとドラッグストア」

「アフターシェイブが切れそなんだよな……あと、電池とチーズ

と……一緒に行つた方が早いか

「外は寒い。何か着たほうがいいよ」

「忠告ありがとう。そうするよ」

おれもマフラーを首に巻きつけ、準備完了（もちろんそれ以外もちゃんと身に着けている）。

アパートメントのエントランスを出たところで、ポールは「あれ……」と足を止め、入り口の扉を押さえているひょろつとした若者に「やあ」と声をかけた。それに応え、「ここにちは」と瘦せた若者。茶色の巻き毛が、顔の前にヤル気なさげに垂れ下がっている。

「ヘンリーはどうしたの？」とポール。

ヘンリーとは、このアパートメントのドアマンの名前だ。いつもここに立っているのはヘンリーで、瘦せたといひせりの青年とよく似ているが、その年齢は倍も違つだらう。

若いドアマンは答える。

「ヘンリーはしばらく休暇です」

「そりなんだ。どうか旅行にでも行つてゐるのかな？」とポール。

「叔父は実家に帰つてるんです。おれはそのあいだのピンチヒッタ一で」

「へえ、きみはヘンリーの甥御さんなの？ 彼の実家つてロンドンだよね」

「ええ……はい、やう……ロンドンのはあちゃん……ヘンリー叔父の母親なんすけど、彼女がぐわい悪くつて」

「もうなんだ、それは大変だね」

「もう九十五だし」若者は肩をすくめてそう言つた。九十五だった

ら何が起きても仕方ないとでも言つよつた仕草だ。

寒さに鼻を赤くしているドアマンを後にし、おれたちはセントラルパーク方面に向かつ。話題はさつきの“イングリッシュマン・イン・ニューヨーク”。

「ほんとにああいう言い方するんだな。“ヘンリー”おれがそう言つと、ポールも「まさにイギリストて感じだね」と同意した。

「ヘンリーがロンドン出身だなんて、ちつとも知らなかつた」

「そうだね、彼は訛つてないし。言わなきゃ誰もわかんないとと思つよ」

「きみはすゞいな」

「すゞい？」小首を傾げるポール。

「すぐに入とうちとける。さつきもそつだ」

「さつきのは世間話。“つちとける”ってほどじやない」

「それでもおれよりは気さくだ」

「美容師つて商売柄、他人には興味があるんだ」

「“商売柄だから”じゃなくて、それはきみの本質的な部分だろ？そもそもそういう商売を選んだわけだし」

「そうだね。でも誰にでも愛想がいいってわけじゃないよ。一応、相手は見てるつもり」

「うん、それは大事だ」

見ず知らずの人と親しくなる。それはこのマンハッタンでは危険をともなう行為のひとつだ。話しかけられても、話しかけても、まづは警戒しなければいけないという危険な島におれたちは住んでいる。

「きみから見て、さつきの彼は“安全”的範疇にいるってことだな」「ドアマンが危険だつたら困るよ。それにちょっと可愛い子だつたしね」

「可愛い？ ああいうのが好みとは知らなかつた」

「好みってわけじゃないけど……」

「ヘンリーはいざれ戻つて来る。勝負をかけるなら早いうちだ。ドアマンなら毎日会えるわけだし、機会は多い」

ポールはちょっと困った顔をして「ローマンみたいな」と言わないでくれない？」と笑つてみせた。

『ああいうのが好みとは知らなかつた』後になつてみると、これは失言だったと思う。

『ちょっと可愛い子だつたし』これもある意味、ポールの失言。

ほんのわずかな会話のズレ。この時点ではおれたち、どちらもそれに気づいていない。

気がつかれないままにただ終わる事柄と、あのときの予兆に気がついていればと思う事柄。これはたぶん後者の方。電池とチーズとアフターシェイブに気を取られているおれは、かすかな予兆には気がつかない。

電池とチーズとアフターシェイブ。気にかけるべき事柄はこれだけ。それが幸運なことだとは、今のおれには思いもよらないことなのだ。

マーケットの乳製品コーナーでチーズをみつくるつていると、ポールがやってきて、おれの肩をぽんと叩き、「あっちに違う種類のチーズがいっぱいあるよ」と教えてくれる。

「あっち？」

「常設の棚じゃないと!」。 「あっち」言ひて、ぐいとおれの手を引っ張る。

“「あっち」と言われ、手を引かれるなど、ガールフレンド以外にはあまりされることはない。ちょっとびっくりしつつ、おれは彼に誘導される。さほど必要でない場面においてスキンシップするのは、おれの場合、恋人相手にしかあり得ない。しかしポールはこれを少しも気にしていないようだ。人に触れるのを職業としている彼は、スキンシップについての捉え方が、きっとおれよりずいぶん違うのだろう。おれたちが子供の頃、思春期前の年齢だった時分には、“男の子同士”で、こんなことはしょっちゅうだったはずだが、大人になった今のおれには、簡単に男に触れるという習慣がない。無邪気に手を引くポールがどう感じているかは知らないが、こうした何気ない触れ合いに、おれは相手を意識する。べつに意識したくはないのだが、それでも意識してしまうのだ。

たどりついた特設スペースでは、フランスのチーズフェアが開か

れていた。

「ね？ さつきのとこより種類が多い」ポールは微笑み、手を離した。そこでおれはほつとする。なぜほつとする必要があるのかはわからない。そもそも“ほつとする”といつことは、“必要”とは何の関係もないはずだ。それでもおれはほつとしてしまう。したくはないのに意識してしまうように、それは自動的に発生する感情だ。

「白カビのが好きなんだよね？」意識する必要も、ほつとする必要もないはずの、安全な友人であるポールが言つ。「これは？ 食べたことある？」

「ああ……うん、たぶん。いや、どうだつたかな……」

「ぼくも半分払うからさ、これ買つてみない？」

同居のメリットは経済効果。ふたりで買えば、いろいろな種類のチーズが楽しめる。コーヒーメーカーの使い方を覚えてもらう必要があるようだ、おれもこういふのに慣れる必要がある。手を引かれたくらいでびっくりしているのも今だけだ。慣れればきっとなんでもないことになるんだから。

電池とチーズとアフターシェイブ。必要な買い物を済ませ、カフェでちよつと休み、本屋に寄つてから、アパートメントに戻る。所要時間は3・5時間。ひとりで買い物をするときと比べ、倍以上もの時間がかかつたが、体感時間としてはその半分以下に感じられる。この現象について、アルバート・アインシュタインはこう述べている。

『あなたの手を一分間、熱いストーブの上にがざしてみてください。それはまるで一時間ぐらいに感じられるでしょう。素敵な女の子と一緒に座っているなら、一時間も一分間のように短く感じます。それが“相対性”というものです』

素敵な女の子と一緒にでなくとも相対性理論は働いている。気がつけば、すっかり日が暮れていたのがその証拠だ。

アパートメントのエレベーター、ボタンを押すおれの袖口から
のぞいた腕時計に手を止め、ポールが驚いたように言った。
「もつそんな時間？」

「キャラメルマキアートに思いのほか時間を食つたな
『『楽しい時はすぐに過ぎ去る』だね』

ことわざを引用し、現在の状態を簡潔に述べる彼。おれは物理学、
ポールは言語学。言わんとすることはどちらも同じだ。

エレベーターに乗り込むと、ポールは「8」のボタンを押した。
続け、おれが「15」を押すと「間違えた」と笑う。

「まだ慣れない？」

「頭ではわかってるんだけど。習慣だね、無意識で押してた」
エレベーターは八階で止まる。扉が開いた瞬間、揮発油の匂いが
漂ってきた。なんだか美術学校を思い起させる香りだ。

「作業員は帰つた後だね」とポール。「ね、ちょっと降りてみない
？」

「シンナー臭に惹かれたな？」

「うん、ペンキの匂いは嫌いじゃないよ

ホコリとニースの香るフロアに降りる。改装中の廊下は暗く、床か
ら壁からすべてビールで覆われた風景は、近未来を舞台としたSF
映画のよう。

ぐるっと首を廻らせ、ポールがつぶやく。

「へえ……廊下まで塗り直すのか。改装つていつもほとんど改築
に近いみたい」

「ここは立地もいいし、市場に出たらすぐ埋まるだらうな

「部屋は新品同様になるわけだしね。こうこうの不幸中の幸いつて
言つのかな」

「前の部屋に戻りたくなつたか？」

「希望すれば戻れるだらうけど……」ポールはこうで言葉を切り、
それからひょいと肩をすくめ「いいよ、別に」と言つ。

『いいよ、別に』その言葉におれは満足を憶える。

「さあ、もう帰ろうぜ」

もう帰ろう、おれたちの住処へ。新品同様じゃないけど快適な我が家。『楽しい時はすぐに過ぎ去る』それが真実なら、一秒だって時間を無駄にしたくはない。おれたちはエレベーターに乗り、シンナー臭に別れを告げた。

電話を留守電に切り替え、携帯はマナーモードに。クッショーンを叩いてふんわりとさせ、ゆつたりと楽な姿勢をとる。今夜の上映作品は『未来世紀ブラジル』。スクリーンでの大迫力は望めないが、誰はばかることなく酒が飲めるのが自宅での映画鑑賞のメリットだ。『有名なタイトルだよね』DVDのパッケージを見ながらポール。「モンティ・パイソンのメンバーが監督してるんだっけ?」「さすが我が友人。よく知ってるな」

「そりゃあ、きみからモンティの英才教育を受けたから」「テリー・ギリアムの最高傑作を見逃す手はないぜ。『12モンキーズ』よりもずっと素敵だ」

「これはモンティの英才教育の続きなんだね。なにを食べながら観ようか? ポップコーン? ナチョス?」「その両方だ」

「うわ、それは最悪で最高」

溶けたチーズをたっぷりかけたナチョスと、バターが染み込んでベトベトになつたポップコーンを、たっぷりの皮肉とユーモアが染み込んだイギリス映画と組み合わせる。こんな暴挙が許されるのは男友達ならではじやないだろうか。

同性の友人と過ごす時間は、異性の恋人と過ごすのとはまったく違う種類の幸福だ。人と暮らすことが自分に向いていとは思つてもみなかつたが、油と炭水化物をビールで流し込んだり、眠くなるまでDVDを観たりしていると、同居の醍醐味というものが徐々に理解できてくる。それでいて生活の気楽さはひとりでいるときとさ

ほど変わらない。洗面所の育毛剤も隠さなくていいし、素っ裸でオレンジを絞つてもいい。

「ずいぶん昔、おれがいつものように風呂あがりにバスタオル一枚でいたところ、当時つき合っていた女性から、「ここってフットボール部の控え室なの？」と、皮肉を言われたことがある。これを以て、世の女性にとつて男性が生まれたままの姿でいていいのはベッドのなかだけだといふことをおれは知った。

ハンドロールもそこに元に、おれはアルコールを求め、冷蔵庫へと向かう。口元には主題歌のブラジル・サンバ。ここに一緒にいるのがガールフレンドだったら、たぶんこの曲は歌わない。“ムード”とか、“ロマンティック”などを大切とする相手には、ブラジル・サンバは致命的な選曲としか言いようがないからだ。

「ビールまだある？」とポール。おれは冷蔵庫を覗き込み、「あるよ」と返答。

「あるのか……聞かなきやよかつた」

「なんだって？」意味もわからずにおれは笑う。

「“ない”って言ってくれれば、苦しむことはなかった。ああ、どうしようかな……今日はもう飲み過ぎだつてのはわかつてんだ」

「明日は日曜。きみも遅番だろ？」

「そうだけど……」

ポールが口ごもるのもよくわかる。おれだって空き缶の数を数えるのはちょっと恐い。リサイクルに出したら一体いくつセント玉が戻ってくることや。ビールと脂肪と炭水化物、血墮落すぎて危機感すら憶える、ちよつとヤバい種類の幸福。

「ビールじゃなくて、ワインを開けよつぜ」墮落にさらば拍車をかけるおれの提案。

「今から？ ホーマー・シンプソンでもここまでではないな」

「そうさ、彼は妻帯者だからな。おれたちとは身分が違う」

「ホーマーみたいに太るかも」

「今はそのことを考えるのはよそい」

「そうだね。ジムで体脂肪を測定する瞬間までは忘れる」と云ひじよ

うか

「よし、ワインを開けるぞ!」これは最悪で

「最高

ワイン・オープナーのレディを登場させ、コルクをぽんと引っこ抜く。おれたちは幸福を享受していた。だいたいこのあたりまでは。

「その格好でオルガンを弾く?」

台所にやつってきたポールは開口一番、そう言つた。

一瞬、何を言われているのかわからなかつたが、自分の格好を思い出して合点する。“未来世紀ブラジル”的監督、テリー・ギリアムが十八番とする役に“裸のオルガン弾き”というのがある。それは読んで字のごとく、裸でオルガンを弾くという、シンプルなコントのキャラクターだ。

おれは風呂上がりで、冷蔵庫からよく冷えたペリエを取り出していた最中。つまりまたしても素っ裸（腰にはバスタオルを巻いている。しつこいようだが、一応）

「もしオルガンを弾くんじゃないんだとしたら、何か着てくれる?」
とポール。そして「フットボール部の控え室にいるみたいだから」と言つて肩をすくめる。

それに対し、おれの口から飛び出した言葉はこうだ　「　四　　日の毒?」

“しまった” そう思つたのは、ポールがキツと目を細めてこちらを見たからじゃない。彼が口を開き、何かを言いかけてやめ、黙つてキッキンを出て行つたからでもない。部屋の温度が瞬時に下がつたのをおれは感じたし、それが自分の言葉によるものだということとも瞬時に理解できた。言つたそばから後悔するようなジョークつてあるだろ? 今のがまさしくそつ。

「 まづかつたな……」

ペリエの横にいるアンナGシスターズに話しかける。シスターズは笑顔で『 そうね』と同意した。

あんなジョークを言つつもりじゃなかつたんだ。

『 あら、あれはジョークだつたの?』 黒いドレスのアンナGがそう言つと、赤いドレスのアンナGも『 ジョークつて言つより皮肉よねえ』と続ける。

皮肉だつて? 皮肉なんか言つもんか!

『 でも相手は笑わなかつたでしょ』

『 そりよ、ジョークにしちゃ笑えなかつたわ』

ああ、おれだつて笑えない。そもそも笑わそつとか意図したわけじやなく、さつきのはつい、なんとなく口から言葉が転がり出ただ。

『 “ つい、なんとなく” ですつて?』

出た。シスターズよりも恐ろしい、ローマンの幻聴。もしにこに彼がいたら、おれはきっとこいつびざく説教を食らつたことだらう。腕組みをして、冷ややかにおれを見下ろす様が田に浮かぶようだ。

『 ストレートの男は、時にゲイを警戒しそぎるきらいがある』

これは偉大なるローマン・ディステイニーが唱えた説のひとつで、彼によると、ストレートがゲイに不愉快な思いをさせられていると思うのと同じぐらい、ゲイもストレートによつて不愉快な思いをさせられているのだとか。

その説が発せられるや否や、同席していたゲイの友人たちは一齊に首を縦に振り、口々に“ 不愉快なストレートによる体験” を告白はじめた。

「 ゼーなのよ! あたしがゲイだとわかつたとたん、そいつつたらこうよ “ ねえ、きみはなんでぼくの隣に座つたの?” だつて! 」「 ゲイだつたら誰かれ構わず、男とヤリたがるつて思つてんのよね」「 股の間にぶらさがつてるものをしゃぶられると思つてビビつてんでしょ! 」

「またそういうのに限って、お粗末なルックスなのよ

「“自分はゲイに犯される価値がある” なにを根拠にそつ思つんだか理解に苦しむわ」

『うぬぼれてんのよ。馬つ鹿みたい！』

ゲイ差別主義者に向けられた、彼らのキツイ言葉に耳を傾けながら、円卓の中でゆいいつのストレートであるおれは自問する。“自分にその要素がまったくないと言いきれるだろうか” と。

もちろんおれは同性愛差別主義者ではない。だがこれまでの人生でゲイにまつわるジョークや悪口を一度も口にしたことがないと言えば、それは嘘になる。彼らが“不愉快なストレートによる体験”をしているのと同じように、おれもゲイの男から、少なからず嫌な思いをさせられている。しかし不愉快なちょっかいを出してくる奴がゲイだとしても、“ゲイであること”が不愉快なことをさせるわけじゃない。ストレートであってもゲイであっても、嫌な奴は、嫌な奴。性癖はそれになんの関係もないはず。それがわかつていながらも、男から尻をなでられたストレートは恐怖にかられ、思わずこう叫んでしまうのだ。

『なにすんだ！ このホモ野郎！…！』

もしポールがゲイでなかつたら、裸のおれに向かつて“何か着てくれ”などと言つただろうか？

『フットボール部の控え室にいるみたい』 そう言つたのはかつてのガールフレンド。まさかこじでまた同じ台詞を聞かされるとは思つてもみなかつた。

もしポールがゲイでなかつたら、おれは彼に向かつて“田の毒？”などと言つただろうか？

『うぬぼれてんのよ。馬つ鹿みたい』

おれはうぬぼれの強いストレート？ まあそつかもしれない。ママはおれのことを“ハンサムくまちゃん”と呼んでいたし、女の子たちは競つておれの胸に頭を乗せたがつたんだ。これで自分に自信がないんだと言い切るほど、おれは厚顔無恥ではない。

うぬぼれが強いかどうかはともかく、今後はもつと気をつけよう。裸でウロウロしたりせず、クリス・ロックのゲイ差別、ギャグに馬鹿笑いもしない。理由はどうあれ、相手に配慮を持つのは当然のこと。それが人と暮らすってことなんだから。

冷たいペリエを冷蔵庫に戻し、すっかり冷えきった身体に何か着せてやるべく、おれは自分の部屋へと向かう。なんでもいい。まずは何か着よう。これじゃまるでフットボール部の控え室にいるみたいだもんな。

第一のイグニッショーンは、それから割とすぐに発生した。

場所は自宅の洗面所。時間は朝の八時。あごを泡だらけにして、手にカミソリを持っていると、ポールがあらわれた。

「洗面所を？」おれは口に泡が入らないように注意をしながら、最小限の単語を発した。

ポールは「後でいいよ。ぼくはぜんぜん急がないから」と答える。しかし“ぜんぜん急がない”と言いながらも、彼は去りうとしない。

「張り紙見た？」とポール。

「張り紙？」ヒゲを剃りながらおれ。

「今日の深夜一時から四時までの間、ガスが使用できなくなるって」「そうか」

「うん」

“深夜一時から四時までの間”。その間にガスを使うことはおそらくないだろう。なにも今、火急に伝えなければいけない情報だとは思えない。ポールは鏡の中のディーンを見つめ、会話を続ける。

「あのせ、トイレットペーパーを使いきつたら補充しておいてくれないかな」

「してるよ」

「いつもぼくが換えてる」「してるって言つてるのに。

「こつもつてことないだろ？」

「いつもじゃないにしても、ぼくが入ったときにペーパーが切れることがある。このうちにはふたりしか住んでないんだから、ぼくじゃないとしたら犯人はきみしかいなくない？」

肩をすくめ、いたずらっぽく笑うポール。軽く冗談めかした言いで、忠告を促しているのだといふことはわかる。しかしこの話題も今じやなくともいいと思う。血圧が低いおれは、朝に弱い。眠気とダルさで口が重たくなり、会話をするのもおづくうになるのだ。

「……忘れたこともあつたかもな。以後、気をつけるよ」

ぞんざいに答えたその瞬間、鋭い痛みが頬に走った。泡にまみれた鏡の中の顔、その頬に、みるみる赤いものが滲んでくる。ぞんざいになつたのは言葉だけではなかつたらしい。ヒゲを剃りで失敗するなんて久しぶりのことだ。

ポールは背後から鏡を覗き込み、「『めん』と、つぶやく。

「なんで謝るんだ？」

「ぼくが話しかけたからだ」

「カミソリを持つてたのはおれだぜ？　おれがつっかりしたんだ」「でも……」

「きみが謝ることじゃない」冷たい水で泡を流す。顔を拭つと、真っ白なタオルに血がついた。

「薬を塗らないと」とポール。

「いひつて、こんなのトイレットペーパーでも当てときやすぐまとまる。気にするなよ、オーケー？」

「……気にされるのは迷惑？」

「どういう意味だ？」

おれがそう訊ねると、ポールは黙ってしまった。“どういう意味だ？”は言い方がキツかったかもしれない。蛇口を閉めて、もう一度ていねいに聞き返すと、ポールは「気にしないではいられない」と答えた。

「誰のせいであろうと、友達が顔から血を流していたら、ぼくは氣

にしないではいられないんだ。でもそれが迷惑だつていうなら、今後は何も言わないよう気につけよ』

「おおげさだよ」

おれはそう言つて少し笑う。ポールは笑わなかつた。なんとなく妙な空氣だ。何か言つべきなんだらうかと、おれが考えていると、ポールはなにかが腑に落ちたとでも言つようになさく頷き、無言のまま洗面所から出ていった。

じつちはなにも腑に落ちていない。だが今のやりとりを蒸し返しあくはない。蒸し返す？ なにをだ？ いつたいなにがどうなつたつて？

頬の傷はと鏡を見ると、それは思つたより深かつたらしく、顔面はホラーの様相を呈していた。床に落ちた血をトイレットペーパーで拭い、バスタブに腰掛け、頬にタオルを押し当てる。朝は誰だつて忙しい。悠長にヒゲを剃つていられるのはひとり暮らしでいるうちのこと。朝っぱらから洗面所を独占しないよう、今後は電気カミソリを使つた方がよさそうだ。

頬の痛みは続いている。薬を塗つた方がいいことはわかっていたが、ポールの好意を断つた手前、そとはしたくなかった。いつたいなにがどうなつたつて、自分に関して言えば簡単なこと。おれは意地になつていていたのだつた。

たとえばこうだ

バスタブにお湯を貯めようと/or>して、コックをひねる。そのとき、蛇口の切り替えが「下」に、なつていなかつたせいで、服を着たまま頭から冷水をかぶつてしまつた。

『ああ！ くそ！ やつちまつた！』

そんな体験は誰もある。しかしコックを戻し忘れたのが、自分ではなく別の誰かだとしたら。『ああ！ くそ！ やつちまつた！』の後に、じつは言葉が続くのだ。『あいつがちゃんとしてくれていた

らこんなことにはならなかつた』と。

そんな不幸はまだ訪れてはいないが、これはほんの一例。自分がやらかしてしまった失敗については、ただ自己反省すればいいだけの話だが、ここに相手が関わってくるとそうもいかない。係わる相手がいるということは、自分の感情を向ける対象がいるということ。愛情だろうと腹立ちだろうと、それは自動的に発生し、相手へと向かう。その流れを無理に押さえ込むとどうなるか？ それこそがすべてのニューヨーカーが抱えていて、あまたのセラピストを儲けさせている主な原因。“ストレス”と呼ばれる、緊張状態に我々は置かれるのだ。

休日の午前中、癒しを求めるおれが向かうのは、ヘンな柄のセーターを着たサイコセラピストの元ではなく、自宅にあるコーヒー機一カ一の前。頼もしいマシンは確実に仕事をこなし、エスプレッソの香りはキッキンいっぱいに広がつてゆく。

近年、アロマキャンドルやインセンス（火事の原因にもなつている例のアイテムだ）などがもてはやされるようになつたのは、その香りがもたらす“癒し効果”が広く知られるようになつたからだ。ある特定の匂いで精神の安定が図れるという説にはおれも同意で、コーヒーが抽出される香りはリラックスをもたらす効果があると思う。香りはリラックス、飲むとエキサイティング。それってなんだか素敵な女の子みたいだ。

セットしたコーヒーはひとりぶん。低血圧のおれが起きた頃には、ポールはいなかつた。どこかに出かけたらしいが、どこかは知らない。一緒に住んでいるからと言つて、相手の行動すべてを把握しているわけではないし、そもそも彼のプライベートについて、詳しく述べているわけでもない。お互いにとつて相手が唯一の友人というわけじゃないし、おれよりもポールと親しいヤツはいくらでもいるだろう。女同士の友達は私生活をわかちあつてこそという感があるが、こと男同士となると、そうしたこと話を題にするのは、女性のそれに比べ非常に少ないような気がする。おれはこれまでボ

ールと多くの時間を過ごしてきただが、一緒に暮らしてみると、彼のことを多く知つていいとは言えないという事に気付かされた。今日はどこに行つたのか、どんな友達と会つているのか。なんとなくすら、その想像はつかない。いつもおれたちはどんな会話をしてたつけ？ 映画や音楽、社会情勢や「コシップ」、最近買つたもののことや、話題になつてゐるショップのこと。あんなに何時間もしゃべつていても関わらず、相手の私生活についてはさほど情報を持つていない。干渉することがあまり好きではないとはいへ、こういうときに“たぶん彼はどこに行つたんじゃないかな？”くらいの予想もできないなんて、ちょっとそれは友達としてどうなんだろう。キッチンカウンターにもたれかかり、寝ぐせのついた髪をほつぽつたままエスプレッソをすすつていると、玄関のカギが開く音がした。

「外は寒いか？」

リビングに進み入つたポールにそう声をかける。どうこうわけか、彼は少しひっくりしたような顔でこちらを見た。おれがいるとは思つてもみなかつたというような表情だ。

「どこに行つてたんだ？」

「ホールフーズに」

「スーパーマーケット？ ずいぶん長いこといたんだな？」

彼は手ぶらだ。野菜も缶詰も持つていらない。

「ユニオンスクエアの店舗に行つたから。なかのカフェでお茶してた。あそこ公園が見えるし、気に入ってるんだ」

ポールはマフラーを外しながらそう言い、おれが手にしている口ヒーカップに目を留めた。

「あ……コーヒー、飲むか？ 容れよつか？」

「いや、ホールフーズのカフェでもう……」

「あ、そうか」

たつた今そう言つたばかりじゃないか。これじゃまるでちつとも話を聞いてないヤツみたいだ。

わずかの沈黙が流れ、ポールはそのまま自室へ消えた。沈黙は置きっぱなし。残されたのは寝ぐせ男。

なんだろう、なにかがヘンな感じだ。やりとりにおかしなところはなかつたと思う。『どこに行つてたの？』『どこそこだよ』よくある会話だ。なのほどうしてヘンな感じに？ こういう空気はこれまでに何度か体験したことがある。アリッサ、ベックー、ジル、シヤーロット＝アン。ひとたびこうなると、どの女性とも一ヶ月と保たなかつたが。いや、そうじゃないだろ。おれたちは恋人同士ではないわけだし、ここにかつての法則があてはまるとは考えない方がいい。たとえ恋人同士であつたとしても、かつてうまくいかなかつた法則を当てはめるのは、あまり健全なことじやない。

いつそれが恋人同士だつたなら。こいついう雰囲気を打破するのに肉体的接触を使うこともできるだろ？ それはつまりハグとか、キスとか、セックスとか。うううだらう脳みそを停止させ、肉体と本能を使って、愛と笑いを復活させる。絶対にお互いに触れたくないと思つていいような状態でさえも、これをもつて打破することが可能な場合もある（失敗するときもあるが）。

では男友達には？ じうとうときはどうしたらいいんだろう？ 女性とのやりとりでは、かなりの修羅場を超えてきたと自負のあるおれだが、こと男同士となると、なにをどうしていいのやら途方に暮れる。昔からおれは同性との付き合いが苦手だつた。苦手なもの避け続けた結果、今に至るわけだから、途方に暮れるのもやむなしというもの。おれが未だにフランス語が話せず、ジェイムズ・ジョイスを読み終わらず、棒高飛びができるのも、苦手なものを避け続けた結果だ。

肉体的接觸以外の手段はないのかつて？ 関係性がマンネリ化したとき、アリッサには彼女が前々から欲しがつていたものをプレゼントして（あれはなんだつたかな、ハンドバッグとかだつけ？）、行きたがつていたレストランに予約を入れた。シヤーロット＝アンには花束とバレエ（バレエ！）のチケットを送り、一緒にそれを鑑

賞し、カーテンホールまで眠らないよう努力した。もちろんこの方法もまた、肉体的接觸と同じくらい有効ではないことはわかっている。男友達に花束やハンドバッグを贈る馬鹿はいない。しかし、おれの辞書で“仲直り”や“関係の改善”の項を開くと、『“贈り物”の章を参照』とか『“スキンシップ”に同じ』などしか書かれていないのだから仕方ない。“花束とハンドバッグ”、なんだか自分がすごく浅はかな人間に思えてきた。

「そうよ。あんたは底の浅い男なのよ」

ブラッディ・マリーをすすりながらローマンは無下に言い放つ。急な呼び出しに応えてくれた優しい友達。彼の辛辣な言葉は、その優しさと実にうまくバランスをとっている。

「二十八年も生きてきて、おれに貼られたラベルはそれなのか？」

“ディーン・ケリー、違ひのわかる底の浅い男”

「語呂はいいわね。カードに書いて首から下げておく？」

雰囲気のいい英國風のパブで待ち合わせ、カウンター席に並んで座る一人の男前。ひとりはゲイでひとりはストレート。どうも最近この組み合わせが多い。

酒を呑むには少し早い時間だが、込み入った話をするには、アルコールで舌を濕らせたほうが具合がいい。おれはこれまでの経過をローマンに説明した。ポールとは何かがうまくいっていない。なぜだかわからぬけど、ただなんとなくそうなつてしまつたという話を、できるだけ丁寧に。問題になるような具体的エピソードがあるわけではないので、どう話したらいいのかずいぶん戸惑つたが、その混乱こそが現状をよく表していると、ローマンは忍耐強く耳を傾けてくれた。

「ポールとは話し合つたの？」

「いや、特には。喧嘩をしたとかいうんでもなし、“話し合う”つておかしいだろ。おれたち別に何もなつてないんだから。現状に関

して言えるのは、“底の浅いおれ”ってのを認識したことだけ。それを知る今までの人生の方がハッピーだった

「やう悲觀するものでもないわ。自覺は治癒への第一歩って言ひでしょ？ “自分は底が浅い人生を歩んできたな、さて、じゃあどうしたらいいんだろ？”。やうやうとどんどん道を切り開いていくのは素敵なことよ」

「“ねて、じゃあどうしたらいいんだろ？”。おれはそこでとまつたよ」

「安心しなさい、とまつてやしなこわよ。あたしといひやつてしゃべってござるでしょ？」

彫刻のような美しい顔に、天使のような笑顔を浮かべるローマン。それから「いっそヤツちやつて仲直りつて手もあるけど」と、微笑みを卑猥へと変える。これさえなきやイイ奴なのに。

おれは顔をしかめ、「それが“深い人生”を脱却しようつて奴に言つアドバイスか？」と彼に言つ。

「あり、セックスのある人生は“深い人生”よ。少なくともあんたにとつては、間違いなく“深い人生へのござない”ね。ストレートがゲイになるんだから、そりやもう興味深いこと山の‘’じよ‘’きみもストレートになつたらどう？ 興味深いこと山の‘’じよ‘’だ」「ポールはとつてもいい子よ」

「しつてる」

「ストレートと同居なんかさせとおくれのはもつたいないんだから」「だらうね」

「試しに付き合つていりたんなさい。あの子は間違いなくあんたを幸せにしてくれるわよ」

「試しに付き合つてみるとんて出来ないよ」ジントニックを飲み干し、おかわりを頼む。「彼はおれのこと好きだつて言つてくれた時期もあつたけど

「あの子は今でもあんたが好きよ」

「……とにかく、“試しに付き合つてみるとんて絶対に無理だ

「やつてみなきゃ わかんない」ともあるわよ。飛び込んでみてはじめてわかるのが人生だもの」

「そりゃあ、おれだつて。相手が女性なら今までどんづん飛び込んできただ。インスピレーションで付き合つて、合わなきゃやめる。シンプルなことだ。でも今回はそつこいつとは違ひ」

「男同士だから?」

「もちろんそつさ。でもそれだけじゃない。おれはポールが好きだし、彼との関係を大事にしたいと思つてる。“うまくいかなかつたら、じゃサヨナラ”なんてふうにはしたくないんだ。“じゃあ付き合おう” それではしばらくして、“やっぱり駄目でした”なんて、そんなの。軽々しい選択をして親友を失いたくはない

「「」のままなら失わないとも?」

ジントーックが目の前に置かれた。言葉を失つたのは酒に田を奪われたからだと、ローマンは解釈してくれただろうか。

「あんたには素質があるとあたしは踏んでるの」

「素質」

「ゲイの素質よ」

「なんか頭が痛くなつてきた……」 実際に頭を抱えると、ローマンはおれの手を優しくとり、テーブルの上にそつと戻させた。

「まあでも、わたしは嬉しいわね。“つまくいかなかつたら、サヨナラなんてふうにはしたくない” あなたがそんなふうにポールのことを考へてるつて思わなかつた

「そんなふうについて?」

「真剣について」

「そりやあ友達だからな」

「経済効果のためだけに一緒に暮らし始めたつてわけじゃないのよね?」

「そもそも理由はポールが焼け出されたからだ」

「あら、じゃもし焼け出されたのがわたしでも家に置いてくれた?」「それは……」

「彼だからなんでしょう？」

「暮らしやすい相手だと思ったんだ。一緒にいて疲れないし、同居に適してるって」

「ルームショアに適してる人なんていくらでもいるわよ。あなた、暮らしやすい相手なら誰でもよかつたの?」

「まさか」

「ポールだからなのよね?」

「ちょっと待てよ……これって誘導尋問じゃないのか?」

その質問にローマンは答えず、おれの顔を覗き込むようにして念を押す。

「ポールのことが好きだからなのよね?」

「もちろんさ! だからさつきもそう言つたろ?」

それを聞くと、彼は満足そうにニンマリと微笑み、カクテルに手を伸ばした。

「あなたたちの同居に反対だつていつ声も少なからずあがつてたの知つてた?」

「同居に反対? いつたい誰が反対するって言つんだ」

「ポールの友達とかよ。初耳?」

「初耳だ」

「あの子はあなたのことが好きで、あなたはストレート。“もう出だしから不幸の香りがする。きっとトラブルが起きるぞ”って……みんな結構心配してたんだから」

「きみはおれたちが一緒に暮らすことについて賛成していると思つたけど」

「わたしは賛成よ」

「それはなんで」

「言つたでしょ、あんたには素質があるとあたしは踏んでるの。現にいろいろ物事が動きだしてるわけだしね」

“不幸の香り”に“トラブルが起きた”ってわけか

「ねえ、いいこと。あんたはこれをネガティブに見てるかもしれない

「けど、それこそ“底が浅い”つてもんよ。物事が今までと違った形に変化するときってのは、一見なにか悪い事が起きたように見える場合があるの。新しい出来事に慣れていないと、それは不快に感じられたりもするわ。準備なくプールに飛び込むようなもんね。あなたは人間関係の新しい局面に立っている。どうやって男の友達と愛情をもって付き合っていくか、これまで学ぶ機会がなかつたんですね？」現象は単に現象であつて、結果ではないのよ。悪い事はまだなにひとつ起きてないの。どうこう結果を出せるかはあなたたち次第よ」

「関係の結果はおれたち次第　　そこまで深い話だとは思つていなかつた。やつぱりおれは底が浅いヤツなんだろうか。

沈黙を待つていたかのように、ローマンの携帯が短く音を立てた。彼は液晶を確認し、「そろそろ行かないと」と、つぶやく。「これからデートなのよ

「そうか、金曜の夜だもんな」

「途中でごめんなさいね」

「いや、じつちこわ。忙しいことこの間に呼び出したりして。相談に乗つてくれて感謝してるよ」

「ねえ、あなた自分で気がついてる?」席を立ちつつ、彼は言つ。「これまで“インスピレーション”で付き合つて、合わなきややめる”つてことを選択し続けてきた人が、“うまくいかなかつたら、サヨナラなんてことにはしたくない”つて言つたのよ。それってかなり興味深い変化だわ。これこそ“底の深い人生”的第一歩だつて思わない?」

「そうかもしれない」

「“かもしれない”なんておよしなさい。あなたはよりリアルな人生に踏み込んだのよ。性的に宗皿替えするようなことがあつたらいつでも言って頂戴。そのときこそ、より“ディープ”で役に立つアドバイスをしてあげられると思うから」につこりと微笑むローマン。これから“デート”だという彼のヌーツ姿は一分の落ち度もない。性的

に宗皿替えしていないおれから見ても、それは賞賛に値する出来映えだ。

「なあ、きみはもしかしておれを洗脳しようとしてるんじゃないかな？」

「あら、今頃気付いたのね」ローマンは華やかに笑いながら、店を出て行った。

洗脳と誘導尋問の部分はともかく、彼の言つことは的を得ている。おれは人生の新しい局面に立つてゐるし、それは底の深い人生への第一歩だ。さすが、有閑マダムを相手にカウンセリングをこなす彼だけはある。最後には言つべきことをばっちりとキメてくれた。

ジントニックのグラスは汗をかいている。その水滴でカウンターに模様を描き、しばらくぼんやりしたのち、店を出る。通りを歩きながら、さきほど言われた言葉を考えるともなく反芻してみる。悪い事はまだなにひとつ起きてないという言葉に励まされはしたが、結局のところ、なにをどうすればいいのかはわからないままだ。

『物事が今までと違つた形に変化するときつてのは、一見、なにか悪い事が起きたように見える場合がある』

『そうやってどんどん道を切り開いていくのは素敵なこと』

『どういう結果を出せるかはあなたたち次第』

『セックスのある人生は“深い人生”』

……一気にいろいろ言われたせいが、考えがまとまらない。そもそもこれは“考え”を必要とすることなんだろうか？

どうも本格的に頭が痛くなってきた。考え過ぎの知恵熱かもしけない。それともマジで風邪をひいたのかも。そうだとしたら、酒をおかわりるべきじやなかつたかも。そもそも酒じやなくて、ソフトドリンクにしておくべきだつたかも。かも、かも、かも……。かくもすべては不確かなりだ。

『あの子は今でもあんたが好きよ』

おれはその言葉を聞き流した。言われて動搖したにも関わらず

いや、動搖したからこそ、そこに触れたくはなかつたのだ。』

なんで動搖するの?』とか、根掘り葉掘り、ローマンから聞かれてみる。小一時間も会話をし、気がつけば『ディーンは実はゲイ』つてところに結論が落ち着いてしまう可能性もある。

ポールは今でもおれが好き“かも”。もちろんそれも不確かな情報に過ぎない。

すっかり重たくなった頭を抱え、なんとかアパートメントにたどりつく。エントランスの見慣れた入り口には、見慣れぬ男が立っていた。柳の木のように瘦せた、五十がらみの男性。サイズが合っていないらしい藍色の制服は、肩のあたりが落ちていて、そこはかとない哀れさを醸し出している。彼はヘンリーでも、ヘンリーの甥でもない。第三の男の登場に眉をひそめるおれに、男は軽く会釈をしてドアを開けた。

「ええと……きみは……」

ポールの社交性を見習つて声をかけるも、すぐに言葉に詰まってしまった。ドアマンと会話することなど、そもそもめったにないわけで、何を言つべきかなどの心得もない。

こちらが黙つていると、彼は気をきかせ「あたしはヘンリーのピンチヒッターでさ」と自己紹介をした。その訛りのすごいこと。うちのアパートにはイギリス人のドアマンしか駐在しないというルールもあるんだろうか。

「この間までいた彼はどうしたのかな。ヘンリーの甥の」

「いますよ。さつき交代したばかりで。急病だとか」

「ああ、そう」

ということは、何かの魔法でヘンリーの甥がすぐ老けてしまったというわけではないんだな。

会話が切れ、しばし顔を見つめ合つアメリカ人と英国人。モンティ・パインのコントを思わせる沈黙に、急ぎおれは言葉を探す。「それじゃ、その……寒いから風邪に気をつけて……」

「ありがとう」ぞ」ます。あなたも」

「おれはもう手遅れみたいだ。さつきから頭が痛くつて」

「あれ、それはまあ……お大事に」

「ありがとう」

このやりとりは、おれがドアマンとした会話の最長記録かもしない。どうして今までこういう会話をしてこなかつたんだろう？
答え　おれは本来、他人への興味が薄いからだ。それがなんで今になつてわざわざ会話をしようなんて？

答え　それはきっとポールの影響だ。彼はスーパーマーケットのチーズの試食販売員とだつて言葉を交わす。ポールには自然なことなのだろうが、おれにとつてそれは新鮮なこと。おれは彼に影響されてる。人と一緒に暮らすところいつもあるんだうつ。それともこれは『ポールだからなのよね？』ってことなのか。

家のドアを開くと、思いがけず、軽快な笑い声があれを出迎えた。リビングに入ると、ぱっとこちらに顔を向けるふたりの男。ひとりはポール。彼はソファに座つてくつろいでいる。その右側、おれがいつも座る一人掛けの椅子には、若いドアマンがくつろいでいる。コートも脱がずに立つたままでいるおれに、ポールは「紹介するよ」と言って、おれではなく、ドアマンの方を向いて話し始めた。「彼はディーン、ここに一緒に住んでる。ディーン、彼はドアマンのピート……つて、しつてるよね」

しつてるとも。ヘンリーの甥のイギリス人だ。ただわからないのはどうして彼がここにいて、そのかわりに中世の地下牢から抜け出てきたような門番が外に立つてることだ。

「こんちは」ピートは短く挨拶をした。

「どうも」おれはそれに見合ひの返事を返し、そのまま自室に行つて、戸を閉めた。上着を脱いだところで、コート掛けは部屋の外だということに気付く。また出て行くのはおつづうなので、適當

なところにひっかけて、ベッドに倒れ、転がってみる。

「そうか、おれがローマンに人生相談をしている間、ポールは門番と楽しくやってたってわけか。こういうのなんて言つんだ？」案ずるより産むが易し？さつきまでの自分はとてもなく無駄な時間を過ごしていたんじゃないかと思えてくる。風邪までひいて、馬鹿みたいだ。

「ディーン、入つていい？」

ノックの音と男の声。消去法でいくと、これはドアマンか同居人のどっちかだ。

「いいよ」応えると、ポールが顔を出した。着替えもせずにベッドにうつぶせになっているおれを見て、「どうしたの？」と訊ねる。

「風邪みたいだ。頭が痛い」

「風邪？」

「ああ、たぶん」

悪寒を伴つた諸症状、医師免許を持つてなくとも診断を下せるほどに風邪っぽい。

「大丈夫？」

「ああ」たぶん。

「熱はある？」

知らない。たぶんあるだろ? おれは心でそう応え、声は出さなかつた。

「温かい飲み物を作らうか？」

「いいよ、客が来てるんだろ?」

「でも」

「いいって、おれのこと構わなくていい」

「……なにか怒ってるね?」

「怒つてない。頭が痛いだけだ」

「そう……」

頷くポール。そこに浮かんでいる表情は、おれの説明に少しも納得した様子ではない。

「もし必要があったら呼んで。なにか欲しいものとか、してほしいことがあつたら」そう言つて、部屋を出て行こうとする彼に、おれはありがとうの言葉もない。そのかわり、どうしても聞いておきたいひとつのこと口にする。

「あのドアマン……」

「ピート?」ポールは振り向いた。

「ああ、階下にいるドアマンはピートが急病だとか言つてたけど……?」

「急病? それはちょっとおおげさだね」

ポールはくすくすと笑い声を立てる。なにか面白い話なんだろうか、これは。

「急病っていうか……ピートが具合悪そうにしてたのは事実だね。どうしたのって理由を聞いたら、彼、昨日から何も食べてないって言うんだ。それであんまり氣の毒だから食事を

なんだって? それだけの理由で彼はおれの……おれたちの部屋にいるってのか? ドアマンと親しくなれと言つたのは確かにそうだ。しかし、これはあんまり常軌を逸してるんじゃないだろうか。「……とんだお人好しもあつたもんだな」言いながら、ゆっくりとベッドから身を起こす。「腹をへらしてるから家にあげた? このマンハッタンには腹ペコの奴なんていくらでもいるんだぜ? どこの馬の骨かもわからない男を家にあげるなんて不注意もいいところだ」「不注意つて……ヘンリーの甥だよ?」ポールは不思議そうな顔をした。

「ヘンリーのことだつて知らないだろ?」

「知ってるよ。ヘンリー・ジョーンズ。生まれはロンドン。両親の離婚を期にアメリカに移住。奥さんの名前はメアリで、子供はマイケルとアリスのふたり。マイケルはジュニア野球でバッターをしている。打率は一割九分一厘」「…………知らなかつた」「…………」「だらう?」

「だからと書いて、その甥が安全だとは……」

「さつきから何？！　ぼくが連續殺人鬼でも家に招いたって書いつの？」

「？」

「もしそうだつたらどうする？」

「馬鹿馬鹿しい！」

「連續殺人鬼じゃないとしてもだ、きみのやつてることは何度が過ぎてる。知り合いならともかく、ただ“気の毒”って理由だけで、他人をさっさと招き入れた。気の毒だつて？　そんなのにいちいち構つてどうするんだ？！　アフリカに行けばそこいらじゅう気の毒だらけだ！」

自分の大声が頭に響いた。次に発せられたポールの怒声もまた、おれの脳天を直撃する。

「アフリカ？！　なんの話？！　誰がそんな遠くの話をしてるの？」

！　ぼくは自分の身近な人間に、人として普通の感情を抱いただけだ！　ドアマンの名前が“ドア・マン”だと思つてゐるきみにはわからなくて氣の毒だけどね！」

「ああ、おれは彼には興味がない。いくら可愛かろうとドアマンはドアマンだ」

「可愛い？」

「そう言つたろ？」

「じゃなに？　きみのなかではぼくが“可愛い子を連れ込んだ”つて話になつてゐるの？」

おれは黙つた。こゝのときの沈黙はイエスと言つたも同然だ。ポールはため息をつき、「ストレートと比べてゲイの男性が奔放に見えるのは致し方ないとは思つ」と言つた。「けどまさかきみがぼくのことをそう思つてゐるとはね」

「そんなこと言つてないだろ！　そつちこそなんの話だよー。」「前にも“裸が目の毒だ”とか言つて」

「あれは……！」

形勢が不利になつてきたところで、戸を叩く音がゴングよろしく

部屋に響いた。ドアを開けたのはポール。現れたのはパーティー。

「ええと……もじねれのことでモメてるんだつたら、おれはもひ帰るんで……」

ぼそぼそつぶやく彼に、おれとポールが返事を発したのはまったく同時だった。しかしその内容は真逆。

「いや、なんでもないんだ気にしないで」とポール。

「悪いがそうしてくれ。あんな門番では住人は心もとない」一いつはあれ。

パーティーは肩をすくめ、ポールに礼を述べて「ほんじゃどうも」と、

出て行った。

「……」満足？

ポールはそう言い、嫌いな政治家でも見るような目でおれを見て、部屋を出て行った。そう、おれの部屋からのみならず、彼はこのアパートから出て行ったのだ。（どこにかつて？ そんなの知るわけない！）。

その晩おれはしつかりと寝込み、ポールは帰つてこなかつた。寝込んだのは別に彼が出て行つたからじゃない。これは単に風邪のせいだ。ベッドのなかでアタマがぐるぐるするのも風邪のせいだ。

風邪のせい。

ただの風邪だよ。

そうや。

風邪。

ほんとこ？

つむせこ。

風邪か。ああ、そうだよな？

おい、なんで語尾を上げる？

はいはい。

“はい”は一度だ。

はい。

オッケー。

“ オッケー ” じゃないだろ、風邪なんだから。

それもそうだ。

風邪だ。

そうさ。

この週末で良かつたのは、発病した翌日が休日だったということ。病人は心置きなく寝込むことができ、急に会社を休んだ廉で、上司のシーラに体調の管理ミスを責められることもない。

昨日と今日で、何か他に良かつたこと言えることがあるだらうかと、ベッドに横たわったままぼんやりと考える。

そうだな、おれはとりあえず生きてるし、アパートメントがテロリストに占拠された気配もない。うん、こいつはいいぞ。ほんとよかつた。めでたしだ。

ポールは朝になつても戻らなかつた。きっとそのまま仕事に出かけたんだろう。ポールはいない。おれは生きてる。アパートメントも無事。ほんとよかつた。めでたし、くそつ。

夕方になつて目が覚める。たっぷり汗をかいていたが、思いのほか体調は持ち直していた。

汗をかいたのが功を奏したのか、それともあの頭痛は風邪じゃなかつたのか。やっぱり考え過ぎの知恵熱か？ それとも風邪に似た別の何かだらうか？ 医師免許を持っていないので、診断ミスは致し方ない。

ベッドサイドの目覚まし時計を見る。そろそろポールが帰宅する時間だ。汗で湿つたTシャツを脱ぎ、素早くシャワーを浴びて、マトモな格好に着替え、外に出る。十時間近く食事を摂っていないの

だ。なにか栄養のあるものを胃に入れた方がいい。自分に食事させる必要があるから外に出るのであって、昨日の今日でポールと顔を合わせるのが気まずいから逃げ出すというわけではない。なに？言い訳めいてるって？ そんな穿った目で人の意見を見るもんじゃない。アンナGシステムズがチキンスープを作つてくれるというのなら、おれだって家にいようつてもの。おれは十時間、食事をしていない。もちろんこれは理にかなつた行動だ。

スープスタンドでスプリットピーのスープと、ライ麦パンのセットをオーダーし、ゆっくり時間をかけてそれを食べる。もつと重たいものを食べたいような気もしたが、病み上がりの胃にはまずスープだ。豆のポタージュは身体を芯から温めてくれる。食後のフルーツを突つきながら、いろいろなことを考える。主に昨日のやりとりを。

『ぼくは自分の身近な人間に、人として普通の感情を抱いただけ

』

これは我が友、ポール・コーブランドの答弁。“常識”というものは人によつて異なるものだ。自分が普通だと信じていることを、他人が侵害したとき、そこには摩擦が生じる。ポールが『人として普通』と言つたことは、おれにとつては普通じゃない。

『ドアマンの名前が“ドア・マン”だと思つてゐるきみにはわからなくて氣の毒』

おれは別にドアマンを見下してゐるわけじゃない。よく知りもないドアマンを家に入れることについて苦言を呈しただけだ。しかしポールにしてみれば、おれにとつての普通は、おそらく“薄情者”のカテゴリーに入るんだろう。

おれは人からときどき“冷たい”とか“薄情”とか言われることがある。時に自分でもその自覚はあるが、それはあくまで『人として普通』のレベルの話であり、薄情者を誇りに思つたことなど一度

もない。地下鉄に乗れば、ホームレスの差し出す空き缶にクオーターを突っ込むこともあるし、どこの国で災害が起きれば、人並みに募金もする。しかし“親切な人々”にしてみれば、それだけで充分とは言えないのだろう。親切を自負する奴ほど、他人が親切でないことに腹を立てる。環境に優しくない洗剤を使つてるとか、気の毒な動物の肉を食つたとか、腹ペこのドアマンを極寒のマンハッタンに追い出そうとしたとか（表に立つてるのが彼らの仕事だ！）。してみればおれは、金ピカのロレックスをはめた、一段高いところから見下ろしている、似非クリスチヤンといったところか。しかしおれは一度も他人に「きみは冷たい」だの「薄情だ」だのを言ったことはない。そんなことを他人にズバっと言つてのけるやつに、人の薄情を責める権利があるつていうのか？ 善人なんてくそくらえ。おれはおれの好きなようにやって誰にも文句は言わせない。それがどこが間違つているのか、説明できるのならぜひ教えて欲しいもの……いや、ここは訂正。おれのどこが間違つているかなど、ちつとも教えてほしくはない。薄情者と親切者はなにも教え合はず、互いの住処を対岸に構え、離れて暮らしたほうが身のためだ。

これが底の深い人生への第一歩？ これがよりリアルな人生だつて？

『ひとつ屋根の下に若い男がふたり。そんなシチュエーションでなにも起きないわけはない』

そうローマンは言つていた。そうだ、ある意味それは正解だつた。これが底の深い人生への第一歩、これがよりリアルな人生 しそうだとしたら、おれはすぐにでも回れ右して、元の人生へダッシュしよう。

ローマンは、おれがポールのことを真剣に思つてするのが嬉しいと言つていた。そう言つられて半日も経たないうちに、おれは彼と大喧嘩をやらかした。

確かにおれはポールのことを真剣にとらえてる。真剣に怒り、怒鳴りとばしたと知つたら、ローマンはいつたいどんな顔をするだろ

う。

もしあれがポールでなく、単なるルームショアの相手だつたら、ここまで腹は立たなかつたのではないだろうか。あんなふうに文句を言つこともなく、ここでぐるぐると考えを巡らせていくこともない。ただ静かに腹を立て、不機嫌な田をなんとかやり過へし、翌日はまたいつも通り。

『ポールだからなのよね?』とローマンは言つた。

そう、これは“ポールだから”。良くも悪くも、“ポールだから”だ。おれのことを理解してくれていると思つていた、おれの親友。彼だから腹も立つたし、罵倒もした。どうでもよかつたら無視するとかしたはずだ。

だいたいおれたちはいつからギクシャクしてた？ 裸でうるうろしたときか？ テイレットペーパーの補充を忘れたとき？ まつたく、ビのHピソードも下らなすぎて話にならない。

日が落ちて、店は徐々に混み始めてきた。我に返り、手元を見ると、デザートのカットフルーツはぐちゃぐちゃに潰れていた。いつの間に、誰がこんなことをつけて、そりやあもちろんおれしかいない。おれが無意識でいるつてのは、何か破壊をもたらすんだろうか。潰れたフルーツを食べる気はしない。では潰れた関係性は？まあ、その潰れ具合にもよるだらうね。おれはトレイを返却口に戻し、店を出た。

部屋に戻る前、改装中の例の八階のフロアに降りてみる。

そうした理由は特にない。ただ“まっすぐ自分の部屋に戻りたくない”という、往生際の悪さがあつたことだけは潔く認めたいと思う。

この間とは違い、フロアの明かりは煌々と点いている。ヒスピニック系の作業員がこちらをじろりと一瞥した。そのおつかない顔に、おれは思わず愛想笑いを返す。

「見学で？」と、ぶつかりぼうそく作業員。「もし部屋を見学するんならヘルメットをかぶつて」

「あ、いや、違うんだ。おれはこここの住人でね。ちょっと見に降りただけなんだ」

「それでもヘルメットをかぶつてもらわないとな。それがルールなんだ」

見学でないなら早く出て行つてくれと言わんばかり、作業員は険しい表情で腕を組んだ。もりあがつた腕の筋肉の上には、跳ね馬の刺青が躍っている。このミスター・フューラーの機嫌をそこねるのは、せひとも避けたい。

「ええと……フロアを見させてありがとう」

そそくさとエレベーターへと戻り、のボタンを連打。タトゥー・ガイの視線を背に感じる。作業のジャマをしてごめんなさい。けれども、エレベーターがなかなか来ないのはおれのせいじゃありません。

ようやく迎えが来て、おれは箱に乗り込む。扉が閉まる寸前、奥の通路から一人の男が現れた。どちらも作業服ではなく、普通の格好をしている。ひとりは営業風のスーツ、もうひとりはカジュアルな服装。どちらもヘルメットを装着している。ちょっと今まで、なんだ今のは？ 思わず、扉を開けたい衝動に駆られたが、おれの脳は『そうするまでもない』と言っている。『再度確認するまでもない』と。スージじゃない方の男、それはポールだった。

おれはなんとか、また外にいる。さつきポールの姿を見て、それからエレベーターのボタンの「1」を押した。エントランスに降り、そのまま表に歩き出す。食事はさつきしたばかり、とりたて外に用事はない。もちろんこれは理にかなつた行動……とは言い難いな。さすがに。

ポールはあそこで何をしてた？ 親切者の彼はボランティアで壁

のペンキ塗りを手伝つていたのか？あのスーシの男、彼はきっと不動産屋の営業だ。ポールは元々あのフロアに住んでいた。入居権が優先されるのは、火事の被害者に他ならない。戻ることを希望すれば、ポールは誰より有利に入札することが可能なのだ。ヘルメットをかぶり、ポールが何をしていたのかは想像に容易い。彼は部屋の下見をしていたのだ。それはおそらく、自分の元いた部屋の。

さつきまでフル稼働していた、おれのボイラ。その圧力は低下し、感情の機関車はぴたりと停止している。

薄情者と親切者。彼らはなにも教え合はず、互いの住処を対岸に構え、離れて暮らしたほうが身のためで。さつきまで、おれはそんなことを考えていた。だからポールも同じよつに考えたとしても、なんら不思議はない。おれたちはいつも同じ瞬間に、同じことを考えつく。またいつものシンクロニシティが起きただけのこと。驚くことはなにもない。これはわかりそうな展開じゃないか。

あてもなく歩き続けると、道は途切れ、巨大な公園があれの前に立ちふさがった。ミッドタウンを北に向かえば、セントラル・パークにぶつかる。これもわかりきつた展開だ。日が暮れ始めてから中に入るのにはあまりよくないとはわかつていたが、足を止めるのがなんとなく嫌で、そのまま直進する。公園を出る人々。それと逆の方向に進むおれ。おれは行きたい方に行く。ポールも行きたい方に行く。それがいつも同じ方向とは限らない。何かポエムを作るなら今だ。夕暮れの寂しげな公園で、いいものが書けそうな気がしてきた。

「ディーンおじたん！」

詩人の夢想を破る、元気なかけ声。右足に衝撃を感じ、下を見ると、そこには小さな女の子がへばりついていた。

「ステラ」

プラチナブロンドの天使、その名前をおれは呼んだ。

「ママ！ ディーンおじたんみつけた！」 彼女が振り向いた先には、黒髪で長身の女性が立っている。

「あら、ディーン……」

姪のステラは一歳、その母親はおれの姉、アイリーン。二人共このマンハッタンに住んではいるが、会つことは珍しい。ましてや偶然になんて、もつと珍しい。

「久しぶりね、元気だつた？」皮の手袋をした手でおれの腕を叩くアイリーン。ヒールを履いていても、履いていなくても、彼女はデカい。6・20フィートあるおれと田の高さはほとんど変わらず、顔立ちときたら、誰がどう見ても姉弟にしか見えないといった造形だ。

「ステラがディーンをみつけたんだよ」ちびの女の子はそう主張し、戦利品のズボンを引つ張る。

「そうね、ステラ。あなたは田がいいわ」アイリーンは娘を褒め、それからおれに向かって、もう一度「元気？」と確認する。

おれはうなずき、「こんなどこで何してんの？」と訊ねる。

「なにして、母と娘が公園にいて何かへん？ あんたは？ ひとりなの？」

「うん」

「ひとりで公園ね……。また振られでもした？」

ぐさつ。これが久しぶりに会つた弟に言つて詞だらうか。

「おれだって公園を散歩したいときもあるよ……なんだつてそんなこと言うんだ」

「だつてあんた、嫌なことがあるとよく公園に行つてたじやない。家にひとりでいるのが耐えられなくなるのよね？」

「今はひとりじゃない。友達と同居してるから」

「そうなの？ それはいいわね。楽しい？」

「ああ」

おれは嘘をついた。それこそがおれを公園に向かわせた原因であるにもかかわらず、おれはとつさに嘘をついた。

「ねえ、せつかくだからカフェでお茶でもどう？」

「“いや”よーるぐと”食べるの”おれを見上げて、舌足らずに言

うステラ。

「“いちごヨーグルト”でしょ？」優しく訂正するアイリーン。

「うんそれ。おじたんも食べたい？」

「いいね」

くまのぬいぐるみがいくつも飾つてあるかわいらしいカフHは、子供が一緒にないかぎり、足を踏み入れることのない空間だ。ステラは「」所望の“いちごヨーグルト”。おれとアイリーンはコーヒーをオーダー。ティベアに囮まれて、姉がする話題はふるつくる。

「わたし、もう五年もセックレスなのよ」

おれはぎょっとし、思わずステラの方を見る。彼女は“せっくす”という単語に反応を示さなかつたよつだ。涼しい顔でコーヒーをかき回すアイリーン。おれは安心して話題を続ける。

「五年？…つてことは、そこに座つてゐる子は誰の子なの

「もちろんノーマンのよ」

「じゃ、セックレスじゃないだろ」

「愛のあるセックスはもうとつくの昔に廃れたわ。ステラは奇跡の子よ。あの時だけはなんでかセックスしたのよね。ほんと不思議。きっとこの子はすつごく生まれてきたかったんだと思うわ」そう言って、アイリーンはステラの頭を撫でた。

「セックスしてないからつて愛がないとは言えないだろ？」とくに

熟年の場合は「

「誰が熟年よ。わたしはまだ三十七なのよ。まだ“セックスが必要

なお年頃”なの

「ノーマンとしろよ」

「したくないの」

「我が侶だな」

「違うの。お互にしたくないの。どちらかがしたいってのなら問題だけど、お互いが嫌なんだから、ある意味平和ね。これって気が合つてゐつて言うのかしら」コーヒーをすすり、形のいい眉毛を上

げる姉。彼女の辛辣な口調は、ローマンをはじめとするゲイ連をどこか彷彿とさせるものがある。

「なんでしたくないの。彼、いい男じゃないか」

「そう思うのはあの人々の外観がいいからよ。いい格好しいのくせに家ではだらしない。彼はそういうのを決して外では見せないのよね。わたしはそれがすこぐストレスなの。みんなが言つわ、今あんたが言つたみたいに『どうして？ 彼は素敵じゃない？』『ノーマンはいい父親よね』そやつて結局、わたしが悪者になる……ニニタバコ吸つていいのかしら？」

「駄目だろ」

「タバコの本数も増えたわ。夫のせいで」

「なんなの。まさか浮気とか？」

「そういうのあっても不思議はないわね。でもわたしは腹を立てるのは、もつと日常的なことよ」

「たとえば？」

「そりね……ホーマー・シンプソンってわかるわよね

「漫画の」

「わたしの夫はアレよ」

「全然似てないけど」

「外側はね。でも中身はあんな感じよ。家にいるときはずっとカウチにへばりついて動かない。パーティでは気取つてなにも食べないくせに、家ではカロリーの高いものを食べたがる。わたしはあの人々が床に落とした物を拾つて歩かなきゃならない……」

「ちょっと想像つかないね」

「言つたでしょ、誰もわたしの言い分を信じないって。でも本当よ。彼はバスルームから出ると、いつもタオル一枚でうらうらするんだから。まるでフットボール部の選手控え室にいるみたいよ

おつと、こいつはどこかで聞いた話だ。

「トイレットペーパーが切れても、交換した試しが一度としてない」

「この家の家では、トイレットペーパーはメイドが補充してくれるん

だらうとばかり思つていたが。

「でも浮氣したりとか、子供をぶつたりとかはしないんだろ」

「そんなことしたら即、離婚よ」

「昔、彼に野球を観に連れて行つてもらつたこと憶えてるよ」

「そうね。あの人、子供好きなのよ。ステラのこともとつても可愛がつてゐる。リロイは思春期らしく父親のことは嫌つてゐるけど

「嫌つてる?」

「父と息子つてのはいろいろ対立するらしいわ。男のプライドつてやつかしら。わたしから見たら馬鹿馬鹿しいことでお互い腹を立てあつてゐる」

「女から見たら馬鹿馬鹿しいことでも、男にとひちや真剣なこともあるんだよ」

「やつかしら?」

「そうさ」おれは全男性を代表し、アイリーンに反論した。

「でもまあ、父と息子の争いも今だけだとば思つけど」アイリーンはタバコを手で弄び、そう言つた。「リロイの方が先に大人になるでしょうからね。ノーマンは子供のまんま。彼は身体だけ大きくなつたのね。“自分のしたいことしかしたくない”。社長業はワンマンでもいいかもしねいけど、こと生活となるとそつはいかないわ。わたしにもリロイにも、ステラにだつて自分の感情や意見はある。そこを摺り合わせようとしない人と暮らすのは苦痛以外のなにものでもないわ。彼はわたしの趣味にちつとも理解を示さない。一緒に座つて映画を見るとか、そういうのすらしないのよ。わたしの選ぶ映画なんて、はなづから馬鹿にしてゐつて感じ。夫婦つてセンスが違つと最悪ね」

ポールとおれもセンスは違う。でもポールはもっと柔軟だ。テリー・ギリアムに興味がなくても、まずトライしてみよつとするし、一緒に楽しめないと努力もしてくれる。

「わたしがホームレスにお金を恵んでもあげるとノーマンは怒りだすの。『そういうことをしても問題の解決にはならない』とか、『そ

れで味をしめたら、より社会復帰が困難になる』とかね。まるでわたくしがニューヨークのGNPを下げたとでも言つように、文句をつけるんだから。別にわたしはこの国の貧困にチップをやつてるつもりはないの。ただ目の前に困っている人がいて、それを見なかつたふりなんて出来ないってだけ。もっと個人的な性格のことなのに、あの人はそれがわかつてないの。わかる？ ノーマンはわたしって人間を理解してないのよ。もう十年以上も一緒にいるつてのに。わかる？」

「わかるよ」

わかりたくはなかつたが、よくわかる。これはもつと個人的な性格のこと。ポールもそうだ。彼は单なる親切心からそれをした。おれは彼のことを知つていたはずなのに、そういう性質をすべて無視して、あたまつから怒鳴つてしまつた。

これはニューヨークのGNPがどうとか、社会問題のことじやない。喧嘩の根本にあるのは“もつと個人的なこと”だ。おれが腹を立てたのは、ドアマンを入れたことじやない。問題は“ディーンの意見も聞かずドアマンを入れた”こと。まるでおれの気持ちなんかどうでもいいように扱われたように感じたし、無視されたようにも感じた。それでは反撃に出た。自分がされたと感じたことと同じように、ポールの気持ちを無視し、怒鳴りつけ、彼の行為を理解しようとしたが、されしなかつた。

『わたしつて人間を理解していない』とアイリーンは言つた。ポールもアイリーンと同じように、『理解されない悲しさ』を味わつたのだろうか……。

『なんかわたし、自分のことばっかりしゃべっちゃつたわね』ハンドバッグにタバコを戻すアイリーン。「で？ そつちはどうなの？ 友達と同居してるつて言つてだけど、それつて彼女？」

「いや、男友達だよ。ポールつてヤツで美容師をしてる」

「あんたが男友達と暮らすなんてねえ。ルームシェアするにしても女の子とするかと思つてたけど」

「おれにだつて男友達くらいいるよ」

「そりやそうでしょうけど……あんたは昔つかり“男とはウマが合はない”とか言つてたじやない？ “男と一緒にいると疲れる、女の子といふほうが楽しい”とかなんとか

「ポールは違うんだ。なんて言つた……普通の男友達とはちがつ

「どう違うの？」

「優しいし……頭もいい、服のセンスとかもいいし、美容師としての腕もいんだ。あと、マッサージも。日本で勉強したとかで、もうプロ並みだよ。仕事に対して向上心があるんだ」

「そういうのが“普通の男友達とは違う”ってことなの？」輪郭の描かれた唇の端を上げ、アイリーンはふふっと鼻で笑つた。

「そうだな、これじや経歴書のアピールポイントだ。おれにとつて“彼が普通の男友達と違う”つてのは、そういうことじやないはずで……。

「ポールは……彼とは一緒にいてもちつとも疲れないんだ。それは彼が自然に相手に気を使えるヤツだからで、でも別に八方美人タイプつてわけじゃない。全然マッショなところがないし、でも腰抜けつてもすこく楽しいし……おれたち女子高生みたいにいつも笑い転げてるよ。テレビを見たりスーパーに買い物に行つたりとか、そういう普通のことが彼と一緒にだと何て言つたか、やたら楽しく感じられるんだ」

「“ウマが合う貴重な男友達”ってわけね

「ああ」

「そういう関係は得難いわ。わたしもよく友達と長電話したりする。お互ひ、亭主の悪口を言つてすつきりする。彼女はアラスカに住んでるから、ノーマンも嗅ぎ付けられないってわけ」

「アラスカ？ 電話代がすごいそうだ」

「仕方ないのよ。彼女の夫があつちで仕事しているんだもの。ねえ、すぐ近くにベストフレンドがいるつてのは恵まれてんのよ。親友は

そのへんに「ショック」が転がってるわけじゃない。大事になら」

「ああそつするよ……。なんかそういうのママみたいだぜ?」

「やうなの、年をとるにつれ似てきたと思うわ。やあよね……。」

「ヒーをもう一杯頬もかしら、あなたは? なにか甘いものを?」

「どうしようかな」

「こここのケーキはなかなかよ。頬んであげる」

「こりと微笑むアイリーン。おれに砂糖を『えたがるあたりもママに似てきた。きっとすべて女性というものは“ママ性”を持っているのだろう。

濃厚なチョコレートケーキのおかげか、店を出たときにはおれの気分はずいぶん持ち直していた。歩きながらアイリーンに話したことを思い返す。改めて説明したことにより、明確になつた自分の気持ち。男同士でラクだからってだけじゃない。ましてや経済効果だけのためなんかじゃない。彼だからだ。一緒に住もうと提案したのは他でもないポールだから。おれは彼と一緒に住みたかった。単純なことだ。わかつていたはずなのに、初めて気がついたことみたいに感じられる。

底の深い人生とか、リアルな人生とかはもうどうでもいい。おれはただポールと元通り、いい関係で楽しく暮らしたい。そう思つてるのはおれだけなんだろうか?

ヘルメットをかぶつたポール。その姿におれはショックを受けた。おれはあの時点まで、彼が出て行くことを想定していなかつたのだ。売り言葉に買い言葉。確かに派手にやり合はしたが、まさか本氣で出て行く算段をしているとは。そのことについて、自分がショックを受けたことにもまた、ショックを受けた。おれはいつたい何にそんなに動搖しているのか。以前と同じ環境に戻るだけなのに、まるで振られでもしたかのように(そう、アイリーンの所見は正しかった)ショックを受けた。

『たつた一回ケンカしただけなのに、きみは出て行くだつて？ まさかそんな』

おれは“おれたちの関係”について、何か勝手に過信していたのかもしない。ポールがもし出でていつたらどうなる？ そのまま喧嘩別れをしてしまえば、以前のような関係に戻るのは難しいだろう。時折、友人を介して飲みに行つたり、髪をカットしてもらつたりすることで会つことはある。しかし共通の話題は減り、知らない情報は増えていく。そこでお互いに恋人でもできれば、あとはクリスマスカードのやりとりが精一杯。それから数年の時を経て、「以前は仲が良かつたのに、なんだつてこんなに疎遠になつたんだらう」と思い返す。すると、そこに浮かび上がつてくるのは互いのエゴヒドアマンの姿、そしてトイレットペーパーの補充がどうのいつの

。そんなつまらないことで、おれたちの仲が終わる？ かもしない。このままでいればそれはそのように運んでいくだらう。花束とハンドバッグで済むのなら、百個でもそれを送つてやれるが、もちろんその手は有効じやない。それでもおれはほとんどそうしたい気持ちだつた。他にできることが思いつかない。今、彼に対してもきることがないんだとしたら、せめて自分に向けて、できる限りのことをしてよう。今の自分にしてやれること。必要なのは休息だ。他にマシなことが思いつかない。他にしたいことも思いつかない。

リビングルームにポールの姿はない。自分の部屋にいるのか、それともその中は空なのか。ノックして確かめる気はしなかつた。

室内灯を点けず、暗いなかでミネラルウォーターをグラスに注ぐ。ひとり暮らしであれば、ペットボトルにそのまま口をつけて飲んだところだ。ボトルを戻そと冷蔵庫を開けると、その明かりで一つの影が浮かび上がつた。それはキッチンカウンターの上にある、ワイン・オープナーのレディたち。もしポールが出て行つたら、このシステムズも別々にならなきゃいけないというわけか。

『まあ、ずいぶん勝手な話ね』両手を身体の脇にたらし、赤いドレスのアンナG。『せつかく一緒になれたと思ったのに黒いドレスのアンナGも黙つてはいない。『あしたち、あなたの方のとばっちりを受けなきやならないのか？』

『ごめん。どうやらそのようだ。』

『納得いかないわねえ、あしたちは離れたくないのに』

きみらと一緒に連れて行つてもうひょう、ポールに算段するよ。

『納得いかないわ』

なぜ？

『離れたくないのに』

だからふたつ一緒に……。

『あなたはポールと離れたくないのに』

……。

ミネラルウォーターを冷蔵庫にしまい、グラスを持つて自室へ向かう。コートをハンガーにかけ、それからベッドシーツを交換する。白くてぴしつとしたシーツは子供の頃からのお気に入りだ。美しくメイキングしたベッドに寝転がる。美しいことを考えたい。頭の中によけいなノイズが発生する前に、美しいもので自分を満たしたい。ベッドサイドのi podに手を伸ばし、イヤフォンを装着。音量を最大にし、目を閉じる。外界の音は遮断され、意識はシュー・ベルトの歌曲へと旅立つてゆく。ホップクリームのようなディースカウのバリトン。この世界に優しいものはいくらでもある。次に目が覚めたときには、おれもそうでありたいと思つ。今できることはただ眠ること。願わくば現世のこととは関わりのない夢を。無力な男の唯一の願い、ディースカウはもちろん聞き入れてくれた。

翌日、おれが会社から帰宅すると、キッチンにはポールの姿があった。ほぼ一日ぶりに見る彼の姿。ポールはコーヒーメーカーを前

にして、カウンターに寄りかかっている。

おれが「やあ」と声をかけると（“やあ”ってのは変だったかな？）、彼は「エスプレッソマシンを借りようと思つてたところなんだけど」と言った。

「ああいよ。自由に使ってくれて」

「うん、ありがと。でもカフェポッドがどこにあるかわからなかつたから、結局ココアにしたんだ」

ポールの視線の先、ガス台のミルクパンには薄茶色の液体が湯気を立てている。

「カフェポッドはこの引き出しに入ってるんだ」おれはカウンター下の引き出しを開けて見せた。ポッドのある場所や「コーヒーメーカーの使い方を覚えてもらつたところで、それは今後あまり役には立たないかもしねえが。

しゅーっと音を立て、ココアがふきいぼれそうになつたところで、ポールはガスの火を止めた。おれが部屋に戻ろうとすると、彼はだしぬけに「きみのお姉さんが店に来たよ」と言つた。

「アイリーンが？」

「うん、そう。ココア、半分いる？」

「いや……」

ポールは黙つてマグカップにココアを注いでいる。おれは上着も脱がず、次なる台詞を待つていて。彼はカップを満たしてから言葉を続けた。

「きみのお姉さん……びっくりしたよ。きみとそつくりなんだね」

「おれが女装したみたいだつたろ？」

「なんだかチップをすごく多めにくれた。友達のお姉さんからそんなに貰えませんつて断つたんだけど、彼女『わたしのお金じゃないから気にすることないわ』つて……すてきな人だね」

「ああ、アイリーンはいつも気前がいい」

「お金のことじやないつてば、わかってるくせに……」ポールは軽い笑い声を立てた。「お姉さんね、きみのことをいろいろ話してた

よ。きみがいかに可愛い弟かってこと、ずっと血腫してた

「おれが可愛いって？ 嘘だらう？」

「ほんとさ。きみはひとつも變わってる。ぼくはひとつ子だから、

ちょっと羨ましいな」

「なにを話して聞かせたんだ？ おれがアイリーンのベッドにカエルを入れたこととか？」

「うん、きみは女の子に振られると公園に行く」ととかね

「それはちがう！」

「こないだ公園で会つたんだって？ きみが落ち込んでるみたいだつたから、カフェに誘つてケーキを食べさせたって。弟は甘いもので元気になるんだって、彼女、笑つてたよ」

それは当たつてい。公園と砂糖はおれの癒しアイテムだ。確かに、アイリーンは弟のことによく理解しているらしい。

「ぼくのことはそのときに聞いたつて。それでわざわざ店に来てくれたんだよ。弟の同居人の顔が見たかったんだろうね」容れてから一度も口をつけていないココアに視線を落とし、しばりくそれを見た後、顔を上げておれの方を向いた。

「きみがぼくのことをどう思つてるか聞いたよ」

ブルーの瞳があれを見つめている。

「ごめんね」

それは唐突な言葉だつた。おれが何も思えられずにいると、彼はまた、唐突に話題を切り替えた。

「もうひとり、ピートじゃない方のダーマンの彼を覚えてる？」

「中世の柳の木みたいな」

「彼もきみのことを話してたよ」

「おれのこと？」

“寒いから風邪に気をつけて”つて。きみは彼にそいつつたんだつて？

おれは記憶の糸をたぐつた。ああそつだ。確かそんなことを言ったと思う。

「彼はそういうふうに言つてもらつたの初めてだつて言つたよ。

それを知らされてぼくは恥ずかしくなつた。きみに謝らないといつて思つたよ」

「どうして?」

「『アーマンの名前を“ニア・マン”だと黙つてゐる』とかなんとか

……

「ああ……」

「きみが優しいってこと、ほんとは知つてゐるのに。ひどい意地悪を言つたね。」（めん）

「いいや。おれだつてきみに怒鳴つたんだ」

「ぼくは配慮が足りなかつた。人を招くときにはその顔を伝えるべきだつたよ。相手も別の誰かを呼ぶ予定があるかもしれないし、具合が悪かつたりする場合もあるんだから。それなのにあんなふうにきみに怒鳴つたりして」

「おれが最初に怒鳴つたからだ」

「それはぼくがきみに対し失礼だつたわけだし……」

「ストップ　このままじゃまた言い合いになるぜ?　“いつた

いどつちが悪いのか”つてな」

ポールは口を三日月型にして笑つた。これはおれの好きな顔だ。「でもティーン、ひとつわかつてほしいのは、ピートは危険なヤツだつてわけじゃないこと。ぼくは毎日何人ものお密さんを見てるから、へんな奴かそうでないかはだいたいわかるんだ。危険かそうでないかぐらいはわきまえてるつもり

「ああ、そうだよな」

ポールはこう見えてずいぶんしっかりした男だ。おれはそのことについて信頼がなかつた。わかっていたはずなのに、あのときはそれを忘れてしまつていたのだ。

「でも……いくら危険じゃないとはいへ、今回は度が過ぎたかもね」ポールは恥ずかしそうに肩をすくめた。「ぼくはちょっとおせつかいなところがあるんだ。お客様には気が利くつて喜ばれもす

るけど、それって日常ではよけいなお世話と紙一重でね。よくボイフレンドにも言われたな。“放つておいてくれ”つて……。そういうトラウマがあるもんだから、きみがバスルームで頬を切つたとき、ついムキになってしまったんだ」

「おれも同じさ」言つて、しきりも肩をすくめる。「“フットボーラ部の控え室にいるみたい”。昔、ガールフレンドに同じことを言われたよ。やっぱりトラウマが刺激されたし……でもまあ一度も言われたんだから、改善する方向で検討するよ。それとトイレットペーパー。あれも気をつける」

「うん」ポールはこくんと頷いた。

なんてこつた。これはあきれるほど単純な話じゃないか。」「いやつて最初つからちゃんと、今みたいに話し合ひべきだつたんだ。

「ねえ、きみがそうしたいなら、これからもたまには裸でうぶつろしててもいいよ」とポール。「今後、人を招くときは前もつて言うから、そのときに服を着てさえくれればね」それからくすつと笑い、「田の毒だけど」と、つけ加えた。

『これからも』『これからは』『そいつが、おれたちは“

「今後”的話をしている? でもそれは……。

「でも……きみは出て行くうと思つてるんだろう?」

「え?」

「きみが八階でヘルメットをかぶつているのを見たんだ。工事が済んだらきみは元の部屋に戻るつもりじゃないのか?」

「ああ、あれ……見てたのか」ポールは渋い顔になった。後をつけられたと思ったのかもしれない。それについては訂正しておかなければ。また喧嘩の種になりかねない。

「見かけたのは偶然なんだ。別にこそこそ盗み見たとかいうわけでは……」

おれの弁明を無視し、ポールはうーんと唸つて頭をかいた。

「ええとね、ぼくがどうしてあそこを下見していたかって……そのままみと暮らすにあたつてのことなんだ。なんていうか先々の

「どういう意味？」

「あのフロアは改装するだけじゃなくって、よりハイエンドになるつて話、ぼくは大家さんから通達をもらつて知つてたんだ。ここより部屋数もひとつ多くて、小さいけどルーフバルコニーもある。建物自体は古いから、新築のアパートと比べて家賃が破格に安いんだ。一般公開したら競争になることは間違いない物件だよ。ぼくは火事の被害者だから、入居については優先権がある。もちろん今いるところよりは賃料は高くなるけど、それもふたりで割れば大した額じゃないし……だから、ね」

「……つてことは、きみは……」

ポールは出て行かない。全身から力が抜けるのがわかつた。彼はここにいてくれる。おれと一緒に。

「そうか……だからきみは……そうなのか……でもだつたら、なんでおれに相談してくれなかつたんだ？」

「ごめん。でもぼくとしても、決めかねてたから。いろいろチェックしたいポイントもあるし、家賃だつて高くなるわけだからね。きみに相談する前に、『こんな感じだけどどう思う？』って言えるくらいのデータをそろえておきたかったんだ」

ああ、そう、なるほど、そういうことか。この一回間、いつたいおれは何を空回りしていたんだろう。

一気に腑抜け顔になつたおれを見て、ポールは不思議そうな顔で「どうしたの？」とつぶやいた。ここ数日、おれがどんな気持ちでいたか、彼は知る由もない。頭の中を“ポール”って単語が埋め尽くしていたことも。

おれは苦笑し、「もう少しできみにハンドバッグを贈るとこりだつた……」と、つぶやいた。

「ハンドバッグ？ なにそれ？」

「いや、気にしないでくれ……。ああ、フロアが冷めたな」

「温めなおせばいいよ。きみも飲むならふたり分つくるけど？」

「うん、じゃ頼む」

冷めたココアを火にかけ、粉とミルクを注ぎ出す。スプーンで静かにかき回し、その渦を見守る。

「これにマシユマロを落とすとつまいぜ。子供の頃よくやった」

「うん、この次はやってみようか」

冷めた飲み物は何度だって温め直すことができる。ココアにマシユマロを落とすこともできる。また次の機会にはトライしてみよう。

翌週、おれとポールはヘルメットをかぶり、一緒に八階の部屋を見学した。どこもヘルメットが入用ではないほど完成していて、新築同然、すばらしい出来映えとなっている。

おれたちはビニールで保護された部屋中を歩き回り、さまざまな箇所をチェックした。

「バルコニーにテーブルと椅子が置けるかな?」とポール。

「これだけの広さなら大丈夫だろ。合ったサイズのものを探せば、たぶん。なあ、ここにペンキがセージ色だと、うちの家具と調和しないよな」

「今ならまだ塗り替えが利くと思つよ」

不動産屋から図面をファックスで送つてはもらつていたが、実際見るとなるとまた話は違つてくる。この物件は、家賃のことを考慮しても引っ越す価値は充分だ。

「バスルームがすごいね」わくわくした面持ちのポール。「スチーモサウナの機能もあるって」と、図面と風呂場をためつすがめつ眺めている。

「スチーモサウナか」おれはポールの横から図面を覗き込んだ。「ジムにあるけど、あそこには冷えたジンを持ち込むことは禁止されてる。それが自宅にあるつてのなら……」

「ジンだけじゃない。アイスクリームだつて持ち込めるよ」

「防水の小型テレビでバスケを観戦できる」

「真っ青なフェイスパックをしても、誰も文句は言わない」

「最高だ」

「最高だね」

微笑み、見つめ合うおれたち。なんとはなしに沈黙が流れる。

なんだろう、なにかがへんな感じだ。今のやりとりにおかしなところはなかつたと思う。なのにどうしてへんな感じに？ こういう空気はこれまでに何度か体験したことがある。アリッサ、ベッキー、ジル、シャーロット＝アン。いつなると、どの女性とも恋愛がスタートしたが……。いや、そうじゃないだろ。おれたちは恋人同士ではないわけだし、ここにかつての法則があてはまるとは考えない方がいい。もしおれたちが恋人同士であつたとしたら、いついうときに肉体的接触を使うのが妥当などころ。それはつまり……ええと、何かそういうことだ。

おれはポールの肩を抱いた。これはプラトニック・フレンドの域を侵害しているだろ？ いや、サッカーでゴールを決めた選手も男同士でハグはする。フランス人ならこんな日の日常茶飯事だ。よしじゃあこの瞬間、おれはフランス人になろう。そうすりやこれはちつとも不自然なことじやない。

「メルシー モナー＝ミ（ありがとう、我が友）」

「フランス語？」

「今だけフランス人だ。おれは」

「なにそれ」ポールはくくつと笑い、「サヴァ？（元氣ですか？）」

と返す。

なるほど、きみもフランス人つてわけなんだな？

おれは応える。「サヴァ ビアン（とても元氣です）」

「ジュ シイ アムルー ドウ トワ（きみに恋してるよ）」

「えつ？ なんだつて？ パルドン？」

早口で聞きとれなかつた……というか、聞きとれたところで意味がわかつたかどうか。おれの知つているフランス語といえば、メリシー（ありがとう）、ボンジュール（こんにちは）、クロワッサン、シルヴプレ（クロワッサンを下さい）くらいだ。

初心者にかまわず、ポールは短文を口にする。

「ジユ ポンス ア トワ（きみを想つてゐる）」

意味不明。メルド！ フランス人なんて言わなきゃよかつた！

「ディーン、ジユ スイ フォール ドゥ トワ（ディーン、きみに夢中だ）」

「アトン！ アトン！ ムッシュー！（待つて、待つてくれ！ ミスター！）」

戯曲の題から持つてきた単語で、セルジュ・ゲーンズブル語に対抗するも、こつちの語彙はもう尽きた。以下は英語だ。

「するいぞ、ジャン＝ポール！ 意地悪するなよ！ セイぱり意味がわからない！」

「ジユスイ パ メシャン、オンパ コモンセ パー ル プリュ シンプル（意地悪なんかしないよ。いちばん簡単などころから始めようか）」

謎の言葉を羅列した後、ポールは思い切りシンプルに言い放った。

「……ジユ テーム（愛してる）」

この単語は知っている。ようやくおれにわかる言葉で喋つてくれたな？

ほつと息を吐き出すと同時に、『あらむじへ』自然にフレンチが口をついて出た。

「メルシー ポール……モナムール（ありがとう、ポール……おれの恋人）」

「間違えたね。モナー＝ミ（我が友）だろ？」

おれの肩に頭をもたせ、くすくすと笑い声を立てるポール。失礼なヤツ。いくらおれでもこんな簡単な語彙を間違えるもんか。

おれはしつかりとポールを抱きしめ、もう一度、ちゃんと聞こえるようにはつきりと告げる。

「モナムール、ジユ テーム（おれの恋人。愛してる）」

「ディーン……」

「“ジユ テーム”だ」

こんなにずっと、ひとりの人間のことを考えてる。去年のクリスマスのときもそうだった。ポールがもし女性だつたとしたら。おれは自分の気持ちを即座に認め、それが向く方へと自然に行動を移したことだろう。『おれはゲイじゃない』そうしたアイデンティティは、おれ自身に“本当の本心”を気付かせる妨げになつていった。おれはこの気持ちを認めなければならぬ。ポールに出ていってほしくはない。別な男と暮らしてほしくはない。この部屋で彼と一緒におれはポールと共にありたい。

ポールは優しくおれの腕をほどいた。ヘルメットの瞳は光に輝いている。

「ジユ タンプラス……」

「パルドン? (なんだつて?)」

彼のフレンチをおれが理解する前に、ポールは行動でその言葉の意味を示してきた。

“タンプラス”。そうだ、これは“キス”という単語だつたつけ。キス、キス、キス……おれはポールとキスしてる。ゲイじゃないのに奇妙なことだ。しかもそのことが少しも嫌じやない。いつたいこれはどういうわけだろう? おれがローマンの仲間かどうかはともかくだが、このキスは悪くない。これを以て、今どきの小学生ぐらにはレベルが追いついただろうか……。

「……で、ここにこのツマミを回して、ミルクピッチャーをノズルに当てる……こうやって泡立てる」

日曜の午後。真新しいキッチンで教授するのは、コーヒーメーカーの使い方と、美味しいカプチーノの作り方。講師はバリスタ、デイーン・ケリー。

「ミルクフォームを注ぐときには、最初は勢いよく、それから徐々にピッチャーをカップに近づけて……こうやってゆっくりと注ぐ。

こうするとミルクの泡がいい感じにエスプレッソと混ざるんだ」「すごい、プロみたい」感嘆するのはポール・コーブランド。素直な彼は実にいい生徒だ。

「きみが家にいたら、ぼくはカフェに行かなくなりそう」「スチームサウナのせいで、ジム通いも遠のいたしな」

広い部屋に引っ越してからというもの、週末に出かける回数は減り、帰宅時間は早まつた。うまいコーヒーと多少のアルコール。DVD鑑賞にスチームサウナ。気候がよくなればバルコニーで日光浴もできる。気の合う友人も、愛すべき恋人も、すべてはこの部屋のなかにある。ボブ・マーレイの歌に出てくるような、シェルターに籠つて幸福に暮らす恋人同士。それはちょっとヤバい種類の幸福感。ポールが笑いながらつぶやく。「こいつって世間と隔絶していくのかも」

おれは「カフェが恋しいのなら縁のエプロンを買ってこようか?」と提案。「そうすりや家でもスター・バックス気分が味わえる」「自宅でスタバのエプロンを? うわっ、なんて言つかそれは最悪で

「最高?」

ポールは答えず、おれの唇に軽くキスをして、カプチーノを手にリビングへと消えた。それって“イエス”という意味なのか? それとも適当にはぐらかされただけ?

キッチンカウンターの上にはワインオープナーのレディたち。アンナGシスターZは仲良く並んで、まっすぐ立っている。おおきなスカートがじやまをして寄り添うことはできないが、それでもふたりはこの状態に満足しているように見える。

互いにとつて、ちょうどいい距離。おれたちのそれはカプチーノとキス。どういうわけだか恋人同士という位置づけに落ち着いた。ここがおれの帰る場所。物語の終わりに主人公は気がつく、『青い鳥はすぐそばに』。もちろんこれは“物語の終わり”なんかじやない。カプチーノとキス おれたちはここから始まるんだ。

End.

(後書き)

最後までお読み頂きありがとうございました。
もしよろしければ、ご感想など頂けると幸いです。

本作品は「Hピソード3 : What It Feels Fo.
r a Girl (<http://ncode.syosetu.com/n4710c/>)」に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4570c/>

ニューヨーク・ラブストーリー / エピソード2：いっしょにくらそう (Border)

2011年8月15日03時25分発行